

2017年9月1日

みずほディーラーズアイ (2017年9月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 107.00 ~ 112.00

国際為替部 為替営業第二チーム 西谷 鷹

■ 先月の為替相場

第1週、1日は110円近辺でサポートされる底堅い地合。2日以降は米7月ADP雇用統計が市場予想を下回ったことや、3日に開催された英中銀の金融政策委員会後におけるカーニー総裁のハト派発言を受けたボンド/円の急落等を背景に、ドル/円は下落。さらに米7月ISM非製造業景気指数が予想を大幅に下回る結果になると、一時110円を割り込んだ。しかし、4日に発表された米7月雇用統計が市場予想比強い結果になると、111.05円まで上昇した。第2週、前週の良い米7月雇用統計を受けたドル買いの動きに支えられ一時110.92円まで上昇。しかし、8日に北朝鮮が弾道ミサイルに搭載可能な小型核弾頭の製造に成功したとの報道や、トランプ米大統領の北朝鮮を強く牽制する発言を受け、110円台前半まで反落。さらに10日に発表された米7月生産者物価指数(PPI)が市場予想を下回ると109円台前半まで続落。11日は東京市場が祝日で休場となる中、発表された米7月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回ると一時108.74円をつけた。第3週、前半は北朝鮮情勢に対する過度な警戒感が後退したことや、米7月小売売上高などの米経済指標が市場予想より良好な結果となったことを受け、110円台後半まで上昇。しかし、週後半はトランプ大統領が米主要企業トップで構成する助言組織の解散を宣言したことを受け、反落。また、FOMC議事要旨で低インフレの状況に関して更に懸念する発言が見られたことがドル売りの流れに繋がった。さらには米国家経済会議のコーン委員長が辞任するとの噂やバルセロナでのテロを受けてリスクオフの展開となり、ドル/円は一時108.61円まで下落した。しかしその後は白人至上主義者と批判されていた米主席戦略官バノン氏が解任との発表をきっかけに109.60円まで上昇した。第4週、ジャクソンホール経済シンポジウムを控えて108-109円台でのレンジ推移。25日には注目されたジャクソンホール経済シンポジウムにおけるイエレンFRB議長講演前に一時109.85円まで上昇したものの、同講演で特段金融政策に対する言及がなされなかったことを受け反転し、109円台前半まで反落した。第5週、29日に北朝鮮が日本上空を通過するミサイルを発射し、太平洋上に着弾したとのヘッドラインを受けて108円台前半まで急落。その後、一時108.27円をつける場面が見られたものの、過度な北朝鮮リスクの高まりには繋がらず、ドル買戻しが優勢となると109円台後半まで反発した。30日は良好な米経済指標を背景に110円台半ばまで上昇。31日も底堅い推移が続いた。

■ 今月の見通し

今月のドル円相場は上値の重い展開を予想する。今後、ドル円相場のドライバーとなり得るトピックスは大きく分けて以下の3つ。

①FRBの金融政策、②米国の政治動向、③ECBの金融政策。

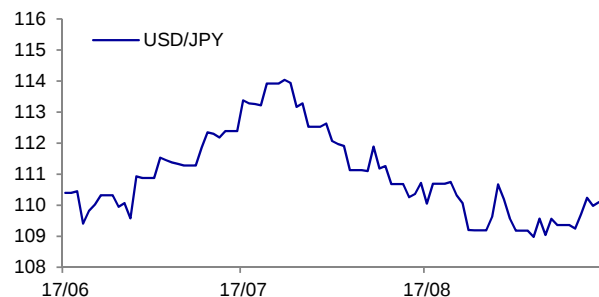
①については先月のジャクソンホール経済シンポジウムでのイエレンFRB議長のスピーチにおいて、特段金融政策に言及がなく、失望売りを招いたことは記憶に新しい。同講演を受けて市場の利上げ織り込みも低下しており、12月FOMCで残り1回の利上げを見込む向きは4割弱にまで落ち込んでいる(2018年3月でようやく5割)。今後の利上げペースが引き続き経済データ次第の“LIVE”とするスタンスは変わらないと思うが、FRB内でも足許のインフレ率の弱さが長期化するとの声が増えている中、今月のFOMC(19・20日)で公表予定のドット・チャートが下方修正される可能性は少なからずある。市場の予想に収斂する形でFRBの姿勢がハト派傾斜すれば、一段とドル売りが進む可能性は高く、そのタイミングでは年初来安値更新も視野に入ると考えている。一方、バランスシート(B/S)の縮小に関しては、今月のFOMCでアナウンスがあることはすでにコンセンサスとなっている。FRB内でリスクアセットが過大評価されているとの懸念が燃えているだけに、B/Sの正常化には強い意志を持って取組んでいる印象を受け、その点がブレることは考えにくい。

②については今月の議会再開後、債務上限問題と税制改革を中心に議論が進むと一部で報じられている。ムニューシン米財務長官は9月中の債務上限引き上げに自信を覗かせており、税制改革と合わせて進展が見られればポジティブに作用する可能性は高い。しかし、オバマケア代替法案すらまとめられていないトランプ大統領の政治手腕にはすでに期待感はなく、加えて未だ解決されていない人種差別問題やメキシコとの国境の壁問題等、様々な問題が山積されていることを踏まえれば、債務上限問題や税制改革についても過度な期待は禁物であろう。③については7日(木)に予定されているECB理事会次第であるが、シントラ発言以降に見られた欧州金利・ユーロ上昇に伴う、ドル/円上昇リスクは低いように感じる。ドラギ総裁自身が緩やかなペースでの緩和縮小を思考していることや、急激なユーロ高を受けて少なからず懸念を抱いているとすれば、さらなる急激な変化を誘発するような言及等は控えると考えるのが自然であろう。

結局、ドル/円を積極的に買う材料に乏しく、FRBの年内追加利上げ期待の後退、米政治リスク等々を勘案し上値の重い推移を基本線に臨みたい。

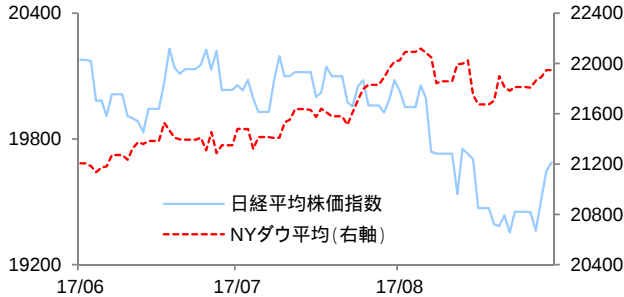
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	米ISM製造業	7月	56.5	56.3	57.8
8/3	米ISM非製造業	7月	56.9	53.9	57.4
8/4	米非農業部門雇用者数変化	7月	180K	209K	231K
8/4	米失業率	7月	4.3%	4.3%	4.4%
8/4	米平均時給(前月比)	7月	0.3%	0.3%	0.2%
8/11	米消費者物価指数(前年比)	7月	1.8%	1.7%	1.6%
8/15	米小売売上高(前月比)	7月	0.3%	0.6%	0.3%
8/30	米ADP雇用統計	8月	185K	237K	201K
8/30	米GDP改定値(年率/前期比)	2Q	2.7%	3.0%	2.6%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ドル・ブル (5名、107.00～115.00、中心108.00～114.00)

加藤	109.00 ～ 113.00	米国がB/S縮小へと乗り出し、且つゆつくりとした利上げを継続する可能性は十分あり、他方ECBのテーパリングも視野に入ってくるとなればクロス円での買い圧力が高まる。それがドル/円の下値を支えと考える。
高田	108.00 ～ 115.00	米金融引締めの手掛りとなる経済指標や要人発言を背景にドルがサポートされる展開を予想する。一部弱気な発言も見られたがFRBは引締め姿勢を崩しておらず、良好な経済指標が確認されると共に金利差拡大が意識されドルは底堅く推移するであろう。
佐藤	108.00 ～ 114.00	最近発表された一連の米経済指標は良好な結果が多く、ドルの支援材料となりそうだ。また、B/Sの縮小開始決定が期待される19～20日開催のFOMCに向けて、ドル/円は堅調な展開を予想する。
下山	107.00 ～ 115.00	主要中銀の中でのBOJの金融政策のトーンの違いは顕著。米国の政治リスクや地政学的リスク等はくすぶり続けようが、市場がやや慣れてきている感もあり、結局は金融政策を受けたトレードがベースになろう。ドル/円・クロス円ともに底堅い展開を予想する。
鶴田	108.00 ～ 114.00	今月のFOMCにて大方の予想通りB/S縮小の開始時期が明らかとなれば安心感が広がるだろう。足許の軟調なインフレ動向に対するネガティブな材料に下押しされる展開には注意したいが、米議会も休会明けとなる中でドル/円が大きく上値を切り上げるイメージはないが基本的には底堅い展開を予想する。

■ ドル・ベア (7名、106.00～113.00、中心107.00～112.00)

田内	108.00 ～ 112.00	FRBの12月利上げ観測が後退する中で、米議会での債務上限問題やトランプ政権の減税政策の行方に注目。年初来安値圏でのドル買い需要を相応に確認した格好ではあるものの、根強いドル安圧力と朝鮮半島を巡る緊迫感継続との見方から積極的にドルの上値を追う展開までは考え難い。
山下	106.00 ～ 111.00	インフレ率が伸び悩む中、ハリケーンによる米経済の悪化による影響も無視出来ず、年内利上げの可能性は低い。加えて、北朝鮮問題も何ら解決に至っておらず、米利上げ後退・地政学的リスクの高まりにより、ドルの上値は重く推移すると考える。
矢野	107.00 ～ 112.00	テーパリング観測は織込まれているものの、北朝鮮ミサイル問題による地政学リスクの台頭・高まり、米インフレ鈍化等から追加利上げに対する期待感の後退、トランプ政権の政治運営に対する不透明感が意識される中、上値の重い地合いを予想。
岡本	106.50 ～ 112.00	FOMCの金融政策変更は相応程度織り込まれている中、今後も緊張する米朝関係が重石に。今月は減税改革や債務上限引上げ、来年度予算やハリケーン被害の対応などトランプ政権の手腕が問われる場面が多く想定されるが、過去を踏まえると期待し難く上値を押さえるだろう。
西谷	107.00 ～ 112.00	FOMCに関してバランスシートの縮小はすでに織り込み済み。足許の低インフレを懸念する声が大きくなる中、利上げについてハト派傾斜する可能性もあり、ドル買いが強まる状況は期待しにくい。債務上限問題等の米政治リスクも燦る状況下、上値の重い推移を基本線に考えている。
森谷	107.00 ～ 113.00	バランスシート縮小は織り込みが進んでおり、年内追加利上げ期待が盛り上がりえない限りは積極的にドルが買われる局面は見られづらいか。米国インフレ鈍化懸念やトランプ政権の先行き不透明感も意識されている状況下、引き続き上値の重い推移が継続すると予想する。
大熊	107.00 ～ 112.00	北朝鮮情勢は一旦緩和したが、再燃リスクは残存している。また、トランプ政権の政策運営の不透明感もドルの重石となっている状況に変わりはない。今月のFOMCでバランスシート縮小が決定されたとしても、インフレ指標の弱さによる利上げペース鈍化の思惑は強く、上値の重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1500 ~ 1.2200
EUR/JPY 128.00 ~ 134.00

国際為替部 為替営業第二チーム 加藤 倫義

■ 先月の為替相場

ユーロ圏7月消費者物価指数(HICP)上昇率が加速したほか、トランプ政権に対する不透明感からドル売りが強まる中でユーロは対ドル1.17台から1.18台半ばまで上昇して後、8月入りした。ユーロ圏4~6月期GDP(速報値)が前期比+0.6%と良好な結果となり、その後ユーロ/円が節目と見られていた130円台半ばを上抜きポジション調整を巻き込みながら131.40円まで急騰すると対ドルでも1.19台前半へと続伸。その後良好な結果となった米7月雇用統計や今秋提出予定とされた包括的な税制法案に関するコーン国家経済会議(NEC)委員長からの前向きなコメントを背景にドル売りポジションが巻き戻されるとユーロは対ドル1.17台前半まで値を下げた。その後、ダドリーNY連銀総裁のインフレ率に対する弱気な発言、米7月消費者物価指数(CPI)の冴えない結果、カシュカリ・ミネアポリス連銀総裁のハト派的発言などを受け米金利が低下する中でドル安が進行し、1.18台半ばまで値を戻す。他方、対円では北朝鮮情勢を受けたドル/円相場下落の影響から水準を切り下げる展開。

月半ばからユーロは軟調な展開。発表されたユーロ圏6月鉱工業生産が予想を下回ったほか、米7月小売売上高や米8月NY連銀製造業景況指数が予想を大きく上回ったことからドル買いが進むと、1.16台後半まで下落。更に発表されたECB議事要旨でECBが年初からの大幅なユーロ高について懸念していることが明らかになると月安値の1.1662まで下落した。

月末に向けてユーロは再度騰勢を強めた。ドイツ連邦銀行(中央銀行)の月報において同国の今年の経済成長率が従来予想を上回る可能性があることと指摘されたことを背景にECBの利上げ期待が再燃し、1.18台前半まで急伸。独8月ZEW景況指数が市場予想を大幅に下回ると反落したものの、ジャクソンホール経済シンポジウムでのドラギECB総裁による講演を控えて様子見ムードが支配的となる中で1.18を挟んでの方向感に乏しい展開となった。ジャクソンホール経済シンポジウムにおけるイエレンFRB議長による講演では、足許のユーロ高に対する懸念が示されなかったことでユーロ買いが進み、ユーロ/ドルは直近高値を上抜け上伸、その後もユーロは底堅い推移が続きついに29日夕刻に1.2000の節目を突破した。ただ、その後は急激なユーロ高の警戒感から調整売りが入り1.1909で越月している。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場に関しては、9月7日にドラギ総裁がいかなる発言をするかで大きく相場が振られるとは思いますが、基調として対円では引き続き堅調推移を予想し対ドルではユーロ高の圧力が後退する可能性を考えておきたい。

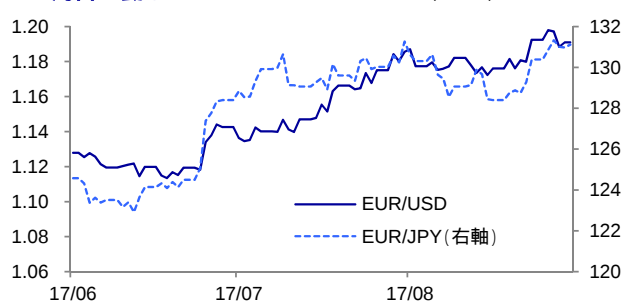
市場参加者に肩透かしを食らわせた7月ECB理事会後の会見におけるドラギ総裁の発言は明らかにシントラ発言の後遺症を意識したものであった。緩和策調整に関する選択肢の策定をスタッフ委員会に指示しなかったことを明らかにし、秋に改めて議論すると明言した。シントラ発言後の混乱のなかでマーケットから性急なテーパリングを催促され、結果としてこれまでの成果が台無しになってしまうことを恐れたことは明らかである。

他方、為替相場参加者の多くは、相場の材料となるテーマを先読みして前のめりで行動することが身上であり、従前ユーロ/ドルのバリエーションに向けて積み増してきたポジションの影響で1.15-1.20ゾーンはガンマネガティブ(すなわち、上に向かえば向かうほど上昇圧力が高まる相場環境)であることがわかっていたため、彼らは上方向にポジションのバイアスをかけたくなることは理解できる。ドラギ総裁にしてみれば、少なくともバカンスシーズンの間はシントラ発言に対する過剰反応を抑え込もうという意図があったかもしれないが、火がついてしまったタカ派期待は鎮火されそうもない。今月最大の注目である7日のECB理事会を前にテクニカルにも心理的にも重要な節目である1.2000に早々到達してしまった。いくら燃え上がる火の勢いを抑えようとしても、ECBがデフレリスクは消滅したと考えていることや一部の国で現行ペースでの国債などの買い入れに限界が近づいていることは隠しようもなく、今月、若しくは来月にはテーパリングが決定されることは不可避であると思う。FRBもこの秋にバランスシート縮小に着手し、その後もゆっくりと利上げを続けるとすれば、本邦がYCCにより金利を抑え込んでいるかぎり、対ドルというよりも対円でユーロの騰勢が維持されると思われる。

では、対ドルではどうかといえば、足許のユーロの急騰に周縁国がどこまで耐えられるかが非常に重要になってくる。元々低いユーロ圏HICPの見通しがユーロ高によって更に押し下げられる公算が高くなっている。周縁国からはユーロ高によって悲鳴が上がる可能性があり、ECB高官や周縁国からユーロ高牽制発言が出てくる可能性がますます高くなっていく。テクニカルには1.20を達成したことによって1.30-1.32が視野に入ってきているが、一本調子のユーロ高よりも調整的な動きの可能性をより見込みたい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	GDP季調済(前期比)1次速報	2Q	0.6%	0.6%	0.6%
8/2	PPI(前期比)	6月	-0.1%	-0.1%	-0.4%
8/17	HICP改定値(前年比)	7月	1.3%	1.3%	1.3%
8/22	独ZEW景況感指数(期待)	8月	15.0	10.0	17.5
8/23	消費者信頼感(速報)	8月	-1.8	-1.5	-1.7
8/25	独IFO景況感指数	8月	115.5	115.9	116
8/31	HICP速報(前年比)	8月	1.4%	1.5%	1.3%
8/31	HICPコア(前年比)	8月	1.2%	1.2%	1.2%

(資料) ブルームバーグ

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (6名、1.1500～1.2300、中心1.1700～1.2200)

高田	1.1700 ～ 1.2200	底堅い相場展開を予想する。堅調なユーロ圏経済指標を背景にECBの金融引締め観測が意識される状況下、マーケットではユーロ買い材料への感応度が高まっている。月並みな経済指標でも欧州債金利が上昇すればユーロはサポートされ易いであろう。
下山	1.1500 ～ 1.2200	7日のECB理事会次第となろうが、ドイツ経済の強さは最早看過はできないレベルだろうから、少なくともトーンはタカ派的なものとなろう。これまでの上昇を受けて一時的に調整が入ることも考えられるが、そもそも世界最大の経常黒字を抱えているため、次第にサポートされると考えている。
西谷	1.1700 ～ 1.2300	6月末以降の値動きに伴いユーロはすでにかかなり高い水準で推移しており、今月のECB理事会でさらなる急激なユーロ高をもたらすような内容は想定しにくい。但し、ECBが今後正常化に向かう方向性はまず間違いなく、ECBの政策変更を背景としたユーロ上昇トレンドは継続するものと考えている。
森谷	1.1700 ～ 1.2200	7日のECB理事会においては緩和縮小に向けての道筋がある程度示されると考えられる。ユーロ高牽制発言には注意が必要ではあるものの、テーパリング期待が高まっている状況下、下落局面では相応の押し目買い意欲が見られると考えられる。引き続き上方向への推移が継続すると予想。
鶴田	1.1750 ～ 1.2250	注目は7日のECB理事会。政策変更に関するアナウンスに対する期待感が高まる中、ユーロ高が続いているが、そのユーロ高に対する牽制発言にも警戒感が集まるところ。内容次第ではユーロ売りの反応も考え得るが、ECBが正常化路線を着実に歩んでいる中でユーロ相場は基本的に底堅い展開を予想する。
大熊	1.1700 ～ 1.2200	ドイツの失業率が東西ドイツ統合後の最低水準まで低下する等、欧州の景気回復は継続しており、ECBによる引き締め観測は根強い。政治不安も後退している状況下では、ユーロの底堅さは続くと思われる。

■ ユーロ・ベア (6名、1.1500～1.2200、中心1.1500～1.2100)

田内	1.1600 ～ 1.2100	ECB理事会にてテーパリング表明の可能性はあるものの、政治的不透明感に加え短期的達成感やユーロ急伸に対する口先介入への不安から一旦はポジション調整の動きが強まるとみる。但しテクニカル的にはトリプルボトムのネックラインを上抜けておりユーロ上昇基調は継続。
加藤	1.1500 ～ 1.2200	注目の9月7日であるが、デフレリスクが遠のいたこととユーロ圏の一部の国では国債等の買い入れに限界が来ていることに鑑み、テーパリング現実味を帯びてきた。ただ、それを背景にしたユーロの上昇は急激過ぎるため、調整相場を見込む。
山下	1.1500 ～ 1.2000	ECB正常化期待が高まってはいるものの、利上げに至るまでには相応の時間を要すると考えられ、それを理由に過度に摘みあがったユーロロングポジションの調整やBREXIT交渉の頓挫によるボンドの急落による連れ安には要注意。
矢野	1.1500 ～ 1.2000	7日ECB理事会後はこれまで積み上がってきているユーロロングのポジション調整が入るリスクを想定しておきたい。通貨高(ユーロ高)懸念は引き続き意識されることから、一方的な上昇には歯止めが掛かるものとする。
佐藤	1.1500 ～ 1.2100	7日開催のECB理事会では、市場が期待する拡大資産購入プログラムの段階的縮小に関する決定が期待されるものの、10月に先送りされる可能性が高いと予想していることや、足許急速に進行したユーロ高に対する牽制への警戒もあり、ユーロの上値は重くなりそうだ。
岡本	1.1600 ～ 1.2100	ECB理事会でのテーパリングに対する期待感からユーロ買いが進んでいるが、テーパリングは漸進的に行われる可能性が高く、急激な金利上昇などの変化は予想しづらい。ユーロ圏各国で景気回復状況がまばらな中、ECBのユーロ高牽制発言を警戒する向きもあり、徐々に上値が重くなろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.3200
GBP/JPY 134.00 ~ 143.00

欧州資金部 日比野 杏奈

■ 先月の為替相場

ポンドドルは1.32台で今月の取引を開始。3日に発表された英中銀(BoE)の金融政策委員会(MPC)では政策金利は据え置かれたものの、賃金の伸びと景気見通しが下方修正されたことが材料視され、ポンドドルは1.31台半ばまで急落。翌日4日に発表された米7月雇用統計が市場コンセンサスより強い結果となり、ダウが市場最高値を更新する中で全般的なドル買いの流れとなり、これを受けポンドドルは1.30台半ばまで続落。

週明け7日は本格的な夏枯れムードの中、1.30台半ばで取引開始。翌8日に発表された米6月求人件数が過去最高水準を記録したことが好感され、ドルが買われるとポンドドルは1.29台後半まで下落。その後数日は流動性も乏しく、目立った材料がない中で1.29台後半から1.30台前半でレンジ推移が続く、1.30台前半で週末を迎えた。

夏枯れ感がさらに増す中、翌週は1.30台前半で取引開始。15日に発表された英EU離脱戦略に関する政府文書では離脱後の混乱回避を目的に暫定関税同盟を提案する方針が示されたが、市場では英政府の楽観的な提案は結局EUに拒否される可能性が強いとの思惑が広まり、ポンドが全般的に下落。さらにデービスEU離脱担当相が「暫定的な関税同盟を結ぶための対価を支払うべきではない」との発言が現実味に欠けると解釈されたこともポンド下押し要因となった。その後同日に発表された英7月CPIが前年比+2.6%と市場コンセンサス(+2.7%)を下回ると、英中銀の利上げ観測が遠のき、1.28台半ばまで下落。その後数日間は1.28台後半でもみ合い。

翌週明け21日は1.28台後半で取引開始。22日は米国の税制改革に向けての交渉が着実に進んでいると一部の報道を受けたドル買いに加え、英国のEU離脱に関する政府文書が現実味に欠けるという市場解釈、英サブプライム消費者ローン株の暴落などのポンド売り要因もあり、ポンドドルは1.28台前半まで下落。その後2日間は1.28ちようど近辺でもみ合い。25日はイエレンFRB議長がジャクソンホールで金融政策について言及しなかった事をきっかけにドル売りとなった事を受けポンドドルは1.28台後半まで上昇し、週明け28日は英国が休日の中で1.29台前半で推移。

■ 今月の見通し

8月中盤から後半にかけて、英政府からEU離脱についていくつかの政府文書が発表された。これらの文書は重要な交渉トピックについて英政府の姿勢をより明確にする事を目的としたものであるが、実際に文書を読んでみると英政府の要求は非現実的なほど強気にみえる。加え、この最新の文書の中でさえもまだ不透明な部分が多い。デービス離脱担当相はこの不透明性は意図的なものであり「建設的な不透明さ」であると主張しているが、8月中のポンドの値動きからみれば、市場はこの見方に懐疑的である。EU側も市場と同じ見方で、29日にもコンケル欧州委員長は「英国の方針を示す文書は一切満足できない」と明言している。

政治家も夏休みから戻ってきており、離脱交渉は関連法案に関する動きが再開される。ポンドの値動きは引き続き離脱関連トピックの進展具合に大きく左右されることとなろう。離脱交渉は8月29日から再開。9月7日にはGreat Repeal Billの審議が開始される(当法案は、英国がEUに正式に加盟することにより、EU法が英国法より優先度が高いことを定めた1972年のEuropean Communities Actを撤廃するもの)。9月24日に行われるドイツの総選挙も大きな山場となる。現在、メルケル首相はドイツ社会民主党(SPD)のシュルツ氏と15ポイントほどの差で優勢とみられており、市場はメルケル首相続投を織り込んでいる。

足許では特にユーロでのポンド安が顕著であり、実際にユーロポンドは8月29日に0.9300を上抜け、昨年10月以来の高値を更新している(もともと、この動きはユーロ高からくる部分もある)。前述の離脱関連トピックが9月になると再び動きだし、今までの交渉過程でうまくいかなかったことが急に進展が見られることは個人的に信じがたく、9月中のポンドドルは8月に比べ下方バイアスが強くなるとみる。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

「当地の通勤事情」

Congestion Charge

ご存知の通り、ロンドンは世界有数の大都市であり、東京ほどではなさにしろ、ロンドン中心部の日中の人口密度は高い。渋滞緩和のため、日中にロンドン中心部で車を運転する場合は一日あたりプラスアルファで£11.50のCongestion chargeが課金される。

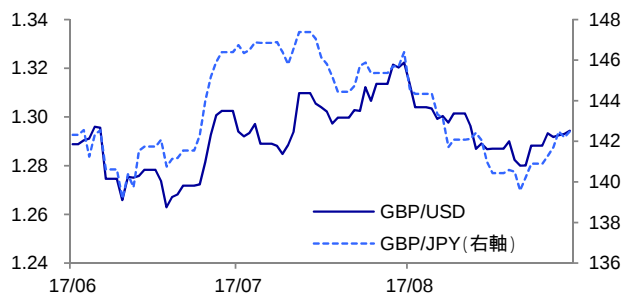
チャリ通勤のすすめ

市内の車の渋滞緩和、健康的な生活の推進、排出ガス削減のために、通勤に使うために購入した自転車・自転車ウェア・自転車グッズ購入代(最大£1,000まで)が免税対象になる。購入額にもよるが、感覚的に30-40%割引になるイメージ。本当に通勤に使っているのかどうかのチェックも特段ないため(自己申告ベース?), 自転車好きにはたまらない税控除政策。

ロンドン市内はの車道の端の方に自転車専用レーンがあり、比較的安全に自転車に乗れる環境が整備されている。特に市内中心部を通っているBicycle highway道中の大きな交差点では自転車専用の信号機も設置されている。ただし、ラッシュの時間帯に多数の自動車が出す大量の排気ガスを吸いながら会社まで自転車を漕ぐ訳で、運動になり肥満対策にとっては良いものの、呼吸器官にとってはむしろ悪影響を及ぼすのではないかと個人的に疑問を感じる。実際に本格的なマスク(プラスチック、鉄のパーツがついているごついもの)をして自転車通勤をしている人を多く見かける。

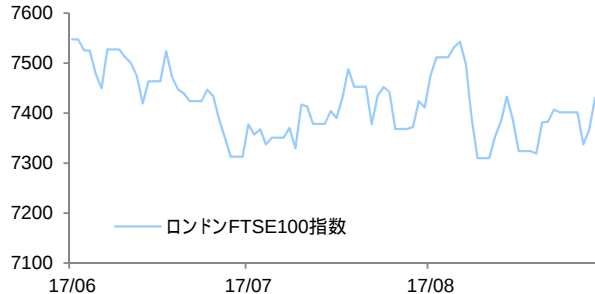
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	製造業PMI	8月	54.5	55.1	54.2
8/2	建設業PMI	8月	54.0	51.9	54.8
8/3	サービス業PMI	8月	53.6	53.8	53.4
8/10	鉱工業生産(前年比)	7月	-0.1%	0.3%	-0.2%
8/10	製造業生産(前年比)	7月	0.6%	0.6%	0.3%
8/15	消費者物価指数(前年比)	8月	2.7%	2.6%	2.6%
8/16	ILO失業率	5-7月	4.5%	4.4%	4.5%
8/17	小売売上高(含自動車/前年比)	8月	1.4%	1.3%	2.8%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7800 ~ 0.8100
AUD/JPY 86.00 ~ 88.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

■ 先月の為替相場

8月の豪ドルは下に往って来い。

1日、豪ドルは0.79半ばでスタート。豪準備銀行(RBA)理事会前に、ポジション調整の動きから豪ドルは月初高値0.8043を付けるも、RBA声明文にて、ここ最近の豪ドル高を牽制する内容が伝わり、0.79台に反落。その後、豪州経済指標(建設許可件数、貿易収支、小売売上高など)は強弱入り混じる結果となり、豪ドルは0.79台で推移。しかし、4日、良好な米7月雇用統計を受けたドル買い進行から、豪ドルは0.78台に急落。7日～10日にかけて、豪ドルはじりじりと0.78前半に下落するも、11日、米7月消費者物価指数(CPI)が下振れ、豪ドルは0.79台に急反発。ただし、北朝鮮情勢に対するリスクの高まりや、ダドリーNY連銀総裁による「年内にもう一回利上げすることが好ましい」との発言を受けて、豪ドルは再び0.78前半に下落。15日には、月初安値0.7808を付けた。

16日、トランプ米大統領が米主要企業トップで構成する助言組織の解散を宣言したことや、ハト派(米金融引締消極派)よりなFOMC議事要旨から、ドル売り進行。豪ドルは0.79台に反発した。翌日、豪7月就業者数は2万7900人増(市場予想2万人)となり、豪ドルは上伸するも、パルセロナでのテロが報じられ、リスクオフの動きが強まり、豪ドルは再び小反落し、結局0.79を挟んで推移。その後、主要な豪州・米国経済指標の発表少なく、豪ドルは横ばい推移。注目のジャクソンホール経済シンポジウムでは、イエレンFRB・ドラギECB両総裁から政策運営に対するヒントの提供はなく、金融市場への影響は限定的。豪ドルは0.79半ばで推移。29日、早朝、北朝鮮ミサイル発射報道を受けて、リスク回避の動きが強まり、豪ドルは一時的に0.79前半に急落するも、売り一巡後は0.79半ばに戻した。結局、豪ドルは0.79半ばで越月。

■ 今月の見通し

FRBの正常化プロセスが鍵を握る。豪ドルは下値が堅い展開を予想。

先月、トランプ政権の「政策思想的支柱」と見られてきたパノン主席戦略官がホワイトハウスを去った。他にもゴルカ国家安全保障担当副補佐官もパノン氏に続いた。トランプ大統領就任以降の解任もしくは辞任した米政府高官は16人にのぼる。このほか8月には、大統領直下の2つの組織、製造業諮問委員会と戦略・政策フォーラムが解散、大統領芸術委員会の全委員16名も辞任し、ホワイトハウス内の権力闘争に敗北、あるいはトランプ大統領に対する信認の欠如と、政権から離れる理由は様々である。さらに、米国の債務上限問題や、税制改革における減税の財政確保においては引き続き不透明だ。また、米国の金融政策においては、次回FOMC(9月19～20日)では利上げは見送られ、資産縮小開始が宣言される模様。しかし、世界的な低インフレから米国も低インフレに悩まされており、7月FOMC議事要旨でも、インフレ率が目標を下回る期間が予想以上に長引く可能性について多くのFOMC参加者が口にしていくことが明らかとなり、年内の追加利上げの余地は狭まってきた。今回のFOMCでは、FOMCメンバーによる経済・政策金利見通しが発表される予定であり、前回6月からの変更有無に注目が集まる。

一方、豪州では、先月のRBA声明文では、それほど強い牽制ではないものの、豪ドル高に対する懸念が示された。また、結びの段落は従来「入手可能な情報を考慮し、理事会は今回の会合で金融政策スタンスを維持することが、持続可能な経済成長及びインフレ目標の達成と整合的に判断した」と締めくくっていたが、今回の声明文ではその前に「低水準の金利は引き続き豪経済を支援している」との一文を挿入して、RBAはしばらく現在の金融政策スタンスを維持することを改めて明確に示したものと見られる。

以上のことから、米国政治不安及び米国金融政策のハト派スタンス観測の高まりより、ドルは売られやすいだろう。他方、豪州はしばらく金融政策の維持が見込まれ、豪ドルはニュートラルだ。従って、ドルも豪ドルも、どちらも積極的に買われるわけではないが、豪ドルの下値は堅いと考える。

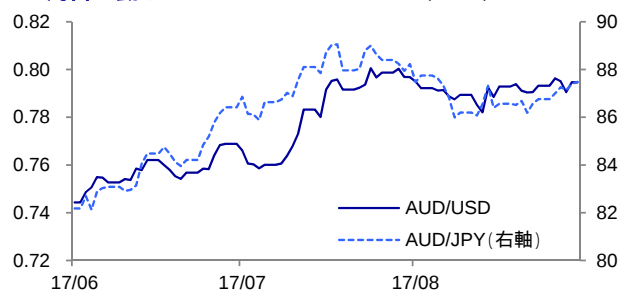
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

オーストラリアの通勤手段は、電車、バス、自動車に加えて、フェリー、トラム、自転車、徒歩など様々です。また、朝からジムに行き一汗流し、その後出社する人も多く、ジャージ姿にスーツ持参の男性をよく見かけます。一方、女性は運動靴で通勤し、オフィスでハイヒールに履き替える人が多いです。靴も傷みにくく、更に電車やバス内でピンヒールで踏まれることも少なく、女性も男性も皆ハッピーですね。オーストラリアでは、通勤手当が支給されない会社が多いため、比較的運賃が安く、様々なところに乗り入れている利便性の高さの観点から、バス通勤の方が多いと思われる。ただし、シドニーでは、OpalCard(電子マネーカード)、SuicaやPasmoの類似品)を使用した場合、OFFピーク時間帯(平日の7～9am、4～6:30pm以外)は通常料金の30%OFFになりますので、観光客の方に購入をおススメしたいと思います。ここからは当地ではなく弊行の通勤事情を語りたいと思います。まず、弊行はWynyard駅直結のため、傘が不要です。また、Wynyard駅は様々な電車やバスが乗り継いでおり、アクセスも良いことがお気に入りです。地下にはシャワースペースがあるとの噂です(事実確認は未だせず)。他方、ビルが古かったり、オペラハウスが観えないことはキズですが、なんと、弊行ビルはSF映画マトリックスのロケ地として使用されたビルになっています。マトリックスの映画上の設定はニューヨークですが、シドニーに住んでいる方、訪れたことがある方は、映画の各シーンにシドニーお馴染みの風景が映っていますので、ぜひ再度ご鑑賞下さい。ネオ(キアヌ・リーブス)が勤務しているとされるビルが正に弊行のビルになります。ここまで宣伝したので、弊行を訪れてみたくなった方もいると思います。もちろん、Welcomeです！ぜひ、シドニーにご来豪の際は、お声かけ下さい。映画の話、ビジネスの話に花を咲かせましょう！！

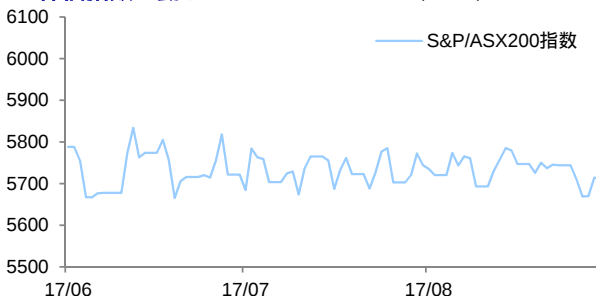
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	RBAキャッシュレート		1.5%	1.5%	1.5%
8/2	建設許可件数(前月比)	6月	1.0%	10.9%	-5.6%
8/3	貿易収支	6月	A\$1800M	A\$856M	A\$2024M
8/4	小売売上高(前月比)	6月	0.2%	0.3%	0.6%
8/9	住宅ローン許可件数(前月比)	6月	1.5%	0.5%	1.1%
8/15	RBA議事録				
8/17	就業者数	7月	20.0千人	27.9千人	20.0千人
8/17	失業率	7月	5.6%	5.6%	5.7%
8/30	建設許可件数(前月比)	7月	-5.0%	-1.7%	11.7%
8/31	民間設備投資	4-6月	0.2%	0.8%	0.9%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2250 ~ 1.2750
CAD/JPY 84.70 ~ 89.70

グローバルマーケティング業務部カナダ室 那須 絢子

■ 先月の為替相場

月初1日、USDドル/カナダドルは1.2480でオープン。8月前半のUSDドル/カナダドルは8月4日の軟調なカナダ7月雇用・貿易収支の結果に加え、北朝鮮を巡る情勢で緊張が高まり、資源国通貨であるカナダドルは売られる展開へ、しかし8月16日発表のFOMC議事録及び25日のジャクソンホールでのイエレンFRB議長の講演がハト派寄りの内容であったためにUSDドルはカナダドルに対して下落、後半は再び1.24後半半での取引となった。

6月、7月と良好な経済指標が続いていたカナダ、しかし4日に発表された雇用ネット変化数は事前予想(前月比+1.25万人)を下回る+1.09万人という結果、また同時に発表された6月貿易収支も36億ドルの赤字と予想の12.5億ドルを大きく上回る赤字幅となりカナダドルはUSDドルに対し大きく売られ、一時1.2668まで上昇。一方で米国の7月非農業部門雇用者数変化数は予想を上回る前月比+20.9万人と2ヶ月連続の20万人超えを記録、これを受け8月2週目の相場は引き続きUSDドル高・カナダドル安で始まった。8日、ミサイルの発射テストを繰り返す北朝鮮に対しトランプ米大統領が「もしも北朝鮮が米国を脅かし続けるなら(北朝鮮は)世界が見たことの無い炎と怒りに直面するだろう」と発言、市場は全体的にリスクオフへと傾き株価、長期金利共に下落、円高・USDドル安が進み、カナダドルもUSDドルに対し売りが優勢となった。

15日、ダドリーNY連銀総裁の「経済見通し通りであれば年内もう1回利上げを支持」との発言と、好調な米7月小売売上高によりUSDドル/カナダドルは1.2778まで上昇、しかし翌日発表されたFOMC議事録にて多くのメンバーが物価の低迷が予想以上に長期化する可能性があると考えていたなど、ハト派寄りの内容が明らかになったためにUSDドルは1.26前半へと急落した。18日に発表された加7月消費者物価指数は事前予想通りで前月比横ばい、これを市場は10月利上げへのシナリオに変化なしと見てカナダドルは上昇、1.26台を下抜けした。

ジャクソンホールのイエレンFRB議長スピーチを控え様子見ムードが強かった4週目は原油価格が1バレル47ドル後半へ回復したことなどからじりじりとカナダドル高で推移。注目されていた25日のイエレン氏のスピーチは金融政策に関する話題に触れることがなく終了、USDドルは大幅に下落しUSDドル/カナダドルは1.2466まで下落した。

31日発表の4～6月期GDPは、個人消費や輸出が好調で前期比年率+4.5%と予想の+3.7%を大きく上回りカナダドルが急伸。発表前に1.26台半ばで取引されていたUSDドル/カナダドルは1.25台へと再び値を戻した。

■ 今月の見通し

6、7月に急伸したカナダドルは8月になると同時に調整に入った。そして8月半ばに調整相場を抜けたUSDドル/カナダドルは再びUSDドル安・カナダドル高で推移、1.2414の直近安値を下抜けすることがあれば9月以降、更なるカナダドル高が見込まれる。

8月31日発表のカナダ第2四半期GDPは、6月にやや成長率が減速したと考えられるものの(予想: +0.1%、前月: +0.6%)、市場はカナダ中銀の+3.0%の予想を上回る+3.7%と堅調な伸びを予想。今回、予想を上回る結果であっても低調なインフレへの懸念やNAFTA再協議第2ラウンドが9月1日からメキシコシティで始まるというタイミングを考えると9月6日会合での利上げの可能性は極めて低い。9月は上記のNAFTA再交渉第2ラウンドをはじめ、米国は議会にて債務上限の引き上げや歳出法案の可決などの重要課題があり、カナダはその動向も踏まえた上で10月の利上げ実行を検討することになる。現時点でカナダの年内利上げ観測は10月が66.2%、12月が74.3%と年内あと1回の利上げが予想されている。

8月発表されたデータは強弱混じりも概ね堅調なカナダ経済の成長が伺え、9月以降もそれが継続するとの見通し。予想を大きく上回るようなデータが9月に継続的に確認されれば、来年以降の利上げペース上昇へと繋がりカナダドル買いの材料になると考えられる。一方で現在、政策実行能力が不安視されているトランプ政権が、債務上限引き上げ、歳出法案の可決へと無事辿りつき、且つ税制改革実行に向け具体的な行動を踏み出せることが出来ればUSDドル高へ進行していく可能性もあり。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

トロント中心部へ通勤する人の多くが車での通勤、またはGoトレインという地域都市間を結ぶ電車を利用するか、トロント交通局(通称TTC)が運営する地下鉄、路面電車、バスを利用しています。中でもTTCはトロント市内に住む人達にとって数少ない重要な公共交通機関です。

1921年に設立されたTTCは北米でニューヨーク、メキシコに続き3番目の規模を誇ります、年間の利用者数は5億3800万人(2016年度調べ)ほど、車両は地下鉄、バス、路面電車共に明るい赤色と白色が基調で、飾り気の無い車内は少しレトロな雰囲気があります。

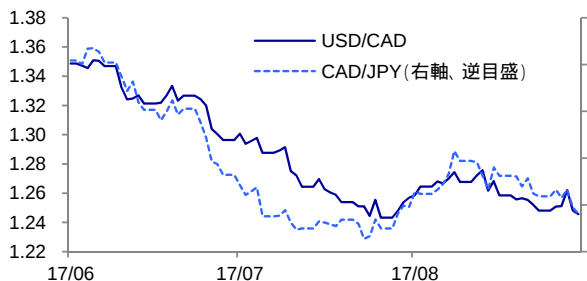
トロント市民の大事な足であるこのTTC、1990年代に州からの補助金が打ち切られてからは財政難に陥ります。そのため古くなった路線のメンテナンスや運行トラブルへ対応はその場しのぎ的なものが多く、私が2015年に1年間利用した時は停電、火災、洪水、車両トラブルがやたら頻繁に起こるなあと感じました。更に週末は工事で地下鉄の一部が完全に閉鎖されるなど、他に移動手段を持たない人にとってはどうしたら良いんだと、非常に不便なことが多かったです。

しかしTTCはちゃんと通常通りに動いていれば、5分以内の間隔で頻繁に運行しているし、終電も2時頃と使い勝手が良く、快適にさえ感じます。便利だけれど故障やトラブルが多いTTCに対し、私も含め多くのトロント市民は愛憎の念が入り混じった感情を抱いています。乗車中に突然停止したりすると、乗客は「またか」、「本当にTTCは使えない」と苛立つのですが、逆に予定通りにスムーズの運行が続くと「何だこれ、どうしちゃったの? こんなのTTCじゃない」とつぶやいたりするのです。

散々言われながらも市民に愛されるTTC、運賃以外の収入も考えてミュージアムとかがあっても良いのでは思う今日この頃です。

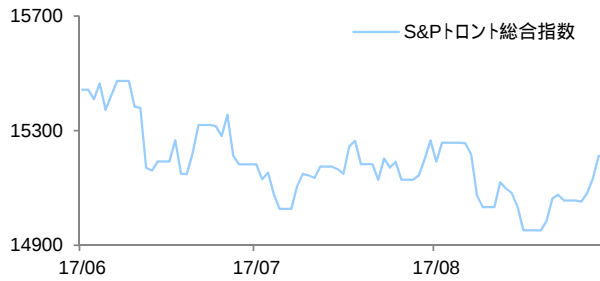
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/4	国際商品貿易	7月	-1.25b	-3.60b	-1.09b
8/4	雇用ネット変化	7月	12.5k	10.9k	45.3k
8/4	失業率	7月	6.5%	6.3%	6.5%
8/9	住宅着工件数	7月	205.0k	222.3k	212.7k
8/17	製造業売上高(前月比)	6月	-1.0%	-1.8%	1.1%
8/18	消費者物価指数コア(前年比)	7月	1.2%	1.2%	1.0%
8/21	卸売売上高	6月	-0.5%	-0.5%	0.9%
7/24	小売売上高(前月比)	6月	0.1%	0.7%	-0.1%
8/30	経常収支	2Q			-14.05b
8/31	GDP	2Q	3.7%	4.5%	3.7%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1110 ~ 1140
 KRW/JPY 9.52 ~ 10.09
 JPY/KRW 9.90 ~ 10.50

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 李サンラク

■ 先月の為替相場

8月のドル/ウォンは往って来い。

ドル/ウォンは1119.4で取引を開始。月初、米国の政策不透明感や政治問題への懸念を背景にドル/ウォン相場は上値重く推移。ただ、8日にトランプ米大統領が、北朝鮮が米国をこれ以上脅かせば、「世界がこれまで目にしたことないような炎と猛威に直面することになる」とし、「米国をこれ以上脅かさないようにすることが北朝鮮にとって最善の策だ」と述べたことで、地政学的リスクが拡大し、11日には月高値となる1148.1まで上昇。

その後、米韓の合同軍事演習(8/21-31)を控え、様子見ムードが強まり、ドル/ウォンは1140を挟むレンジ相場に移行するも、23日に米国務長官が北朝鮮に対し、「過去に見られなかったようなある程度の自制」が見られるとの見解を示したことで地政学的リスクに対する懸念は後退し、ドル/ウォンは上値の重い相場展開に。注目されたジャクソンホール経済シンポジウムでイエレンFRB議長が金融政策に関する具体的な見解を示されなかったこともドルの重しとなった。

29日に北朝鮮が日本の上空を通過する弾道ミサイルを発射し、地政学的リスクが再燃したことから、月末週のドル/ウォンは底堅く推移。堅調な米経済指標が相場を下支え。31日のBOK金融通貨委員会では、市場予想通り政策金利が1.25%に据え置かれ、結局ドル/ウォンは1127.8で引けた。

■ 今月の見通し

9月のドル/ウォンは引続き上値の重い展開を予想する。

韓国の経済指標は全般的に堅調に推移しており、引き続きウォン買い要因となるだろう。ただ、韓国銀行が23日に発表した6月末時点の家計債務(個人負債)は約1388兆ウォンと統計開始以来最多となった。韓国政府は9月に家計債務総合対策を発表する予定であり、特に不動産投機を阻止するための措置が建設業界の重荷となる可能性があることから韓国経済への影響が注目されている。

地政学的リスクの懸念は払拭されておらず、国内外要人発言・ヘッドラインには注意する必要があるだろう。しかし、核実験の実施等、足許の情勢を大きく揺らがすようなイベントがない限り、マーケットへの影響はある程度限定されるか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

韓国ソウル近辺の首都圏に住んでいるサラリーマンの一日平均通勤時間は1時間半ほど、韓国人の通勤時間は世界的にも記録的な水準であり実体体感通勤時間はdoor-to-doorでソウル近郊では一時間半はかかる。

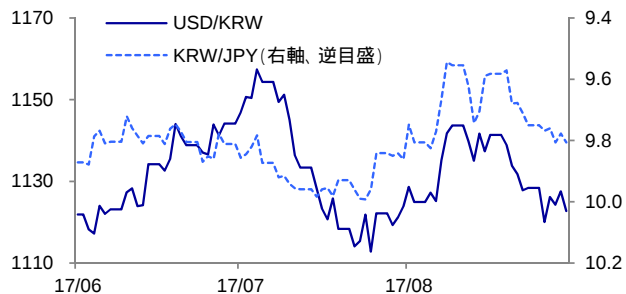
韓国のサラリーマンの通勤時間の長い理由は京畿道からソウルへの流入される人口が多いからです。このような長い通勤時間にもかかわらずソウルから離れて住んでいる理由は住居費用の負担が圧倒的な部分を占めている為、会社が遠くても道の上で長い時間を過ごし疲労が重なったでもやむ得ず通っているわけです。

長い通勤時間は時間の貧困に繋がり、今後も高い住宅の値段による首都圏からの通勤問題は続くと思われる。

韓国ではこのような通勤に対し「出勤戦争/出・退勤台大乱とも呼んでいる」がなんとも笑えない話である。

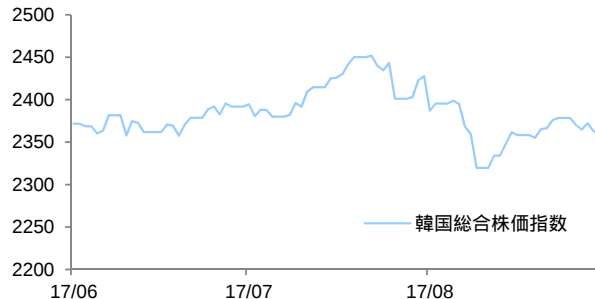
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	日経韓国製造業PMI	8月	-	49.1	50.1
8/1	消費者物価指数(前年比)	8月	2.0%	2.2%	1.9%
8/9	失業率(季調済)	8月	3.8%	3.6%	3.8%
8/11	輸出 物価指数(前年比)	8月	-	8.0%	4.7%
8/11	輸入 物価指数(前年比)	8月	-	5.4%	2.0%
8/25	消費者信頼感	8月	-	110	111
8/29	製造業BSI	8月	-	84	81

(資料)ブルームバーグ

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.00 ~ 30.70
TWD/JPY 3.55 ~ 3.73

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

8月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高の展開。

月初30.230でオープンしたドル/台湾ドルは、トランプ大統領がスカラムチ広報部長を解任したことなどからドルが軟調に推移したことを受け、8/1に30.135まで下落するも、その後は、ドル買戻しの動きも見られ、米7月雇用統計を前に30.2台を回復。

8/4に発表された米7月雇用統計は、非農業部門雇用者数が前月比+20.9万人、平均時給が前年比+2.5%と、ともに市場予想を上回る強い結果となり、週明け8/7の台湾市場では、一時ドル高に振れる場面もみられた。しかしながら、その後は材料難から30.2ちょうどを挟んだ小幅なレンジ内での動きが続いた。

月半ばに入ると、北朝鮮情勢の緊迫化から地政学リスクへの懸念が強まる中、リスク回避的なドル買いの流れが強まり、8月の高値となる30.415まで上昇。その後、ダドリーNY連銀総裁の「年内あと1回の利上げを支持する」とのタカ派的な発言や、米8月NY連銀製造業景況指数、米7月小売売上高がともに市場予想を上回ったことがドル買い材料となる一方、北朝鮮情勢をめぐる緊張が和らいだことや、FOMC議事要旨(7/25-26開催分)の内容がハト派的と捉えられたことなどがドル売り材料となり、30.3台を中心とするレンジ内で推移した。

月後半もジャクソンホール経済シンポジウムでのイエレンFRB議長や、ドラギECB総裁の発言を控えて様子見姿勢が強まり、値動きは限定的となったが、シンポジウムでの講演で、今後の金融政策に対して具体的な言及がされなかったことから、ドルは軟化。月末にかけての輸出企業のドル売りフローも相俟って、8/28には30.130と6月以来の安値をつけた。しかしながら、8/29日本時間早朝に北朝鮮が再びミサイルを発射すると、再びリスクオフの動きが強まり、ドル/台湾ドルは30.200近辺へ反発する展開となった。

■ 今月の見通し

9月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い展開を見込む。

8月に発表された台湾の経済指標をみると、7月の輸出額が前年比+12.50%と2016年後半から続く好調を維持し、10か月連続のプラス成長を記録。2017年下期のスマートフォンの新機種向けの製品出荷が伸びをけん引する形となった。貿易黒字額についても、54億ドルと過去最大となった前月の58億ドルから減少したものの、引き続き高水準の黒字額となっている。物価については、消費者物価指数が前年比+0.77%と前月の同+0.99%から物価の伸びが減速。台風の影響で生鮮食品の価格上昇がみられたものの、全体としての物価の伸びは低調となった。

こうした中、9月下旬には四半期に一度の台湾中央銀行金融政策決定会合が開催される。足元の低調な経済成長率や、インフレの鈍化、台湾ドルが高止まりしていることを踏まえれば、今回の会合において利上げが行われる可能性は低く、政策金利は1.375%で現状維持されるものと見込む。

海外の材料としては、FRBならびにECBの金融政策正常化プロセスの行方が注目される。9月は9/7にECB理事会、9/20にFOMCを控えており、ECB理事会では、来年以降の金融緩和縮小に関する議論、FOMCではバランスシートの縮小開始決定と年内追加利上げに関する議論が焦点となっており、それに向けたインフレ関連指標の結果や高官発言には注目が集まる。

また、8月に入り、ミサイル発射を続けている北朝鮮の動向も引き続き懸念される。軍事衝突が現実味を帯びるなど、これまで以上に緊張が高まれば、リスクオフのドル買い圧力が再び高まることも想定される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

台北での通勤手段としては、日本同様、地下鉄、バス、自家用車の利用に加え、バイクを利用する人が非常に多いです。そして、特徴的なのが、二人乗りや三人乗りをする人が多くみられることです。親が子供を後ろに乗せ、さらに足の間にも乗せたりし、学校へ送って、その後、会社へ通勤する光景はよく見られます。

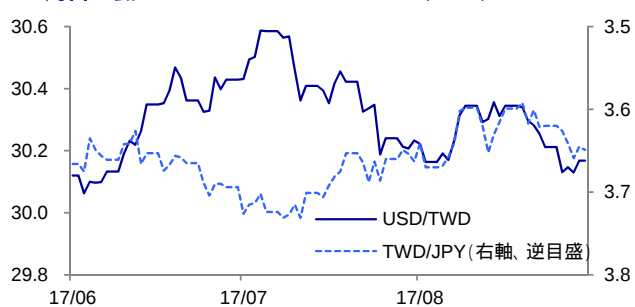
バスや自家用車での通勤は、日本と同じように、通勤、帰宅のラッシュ時の渋滞が激しく、機動力を活かせるバイクはその点からも非常に便利な交通手段となっております。

そのほか、非常に便利なのが、自転車での通勤です。台北では、自転車シェアリングが広く普及しており、会社に駐輪場がなくとも問題になりません。特に「Obike」は好きな場所で乗り捨てが可能となっており、会社の近くで自由に乗り捨てることができます。

難点は、決まったステーションがないため、朝乗りたいときに、家の近くに利用可能な自転車があるかどうか分からないということです。スマートフォンアプリで自転車のある場所を検索することは可能ですが、意外と近くないということがありますので、ある程度時間に余裕をもって家を出る必要があります。

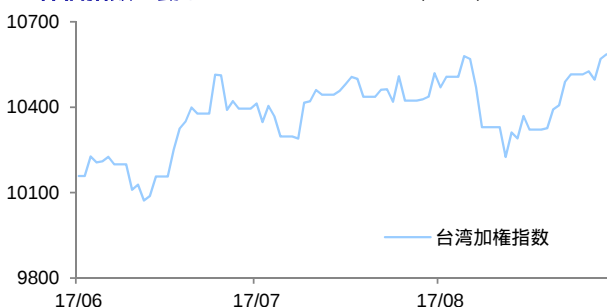
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/4	外貨準備高	7月	-	444.45B	441.94B
8/7	輸出(前年比)	7月	9.80%	12.50%	13.00%
8/7	輸入(前年比)	7月	2.90%	6.50%	3.70%
8/7	貿易収支	7月	4.91B	5.37B	5.83B
8/8	卸売物価指数(前年比)	7月	-	-0.73%	-1.77%
8/8	消費者物価指数(前年比)	7月	0.90%	0.77%	0.99%
8/18	GDP(改定値)	Q2	2.10%	2.13%	2.10%
8/21	輸出受注(前年比)	7月	13.00%	10.50%	13.00%
8/21	失業率	7月	3.80%	3.78%	3.78%
8/23	鉱工業生産(前年比)	7月	3.30%	2.38%	3.53%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8000 ~ 7.8500
HKD/JPY 13.64 ~ 14.20

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【8月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルは一時的に約19か月ぶりとなる7.8278水準まで香港ドル安となるも、香港金融管理局（HKMA）が為替基金短期証券の追加発行を発表したことで7.815水準まで香港ドル高が進行する展開となった。茲許の香港ドル安の流れを緩やかなペースに留める狙いがあるものと想定される。一方で、香港ドル金利とドル金利の金利差は引き続き拡大している状況下、当該事象における影響は限定的なものとなった他、人民元相場に対する強気な見通しが台頭し香港ドルから人民元への資金流入等も散見され、7.825水準まで再び香港ドル安に転じる展開となった。斯かる中、ドル／香港ドルフォワード1年物についても一時的に▲320ポイント付近まで上昇した。

【8月の香港ドル金利市場】

8月9日に、HKMAは9月中旬にかけて為替基金短期証券を400億香港ドル追加発行することを発表した。本件に伴い、インターバンク市場の流動性を図る指標であるHKMAの当座預金残高は、2,600億香港ドル程度から2,200億香港ドル程度まで減少する見込みであるが、概して香港ドルの流動性は潤沢な状況が継続。香港のHIBOR1か月物は0.44%付近から0.42%付近まで低下し、HIBOR3か月物は0.76%付近で小動きの展開となった。斯かる中、LIBORとHIBORの1か月物及び3か月物の金利差は、約0.82%及び約0.56%と引き続き拡大している。香港ドルスワップ金利の3年物は、一時的に1.46%付近まで0.06%程度上昇したが、米金利低下の影響を受けて足許低下基調に転じている。

【8月の香港株式市場】

ハンセン指数は、一時約28か月ぶりとなる27,519水準まで上昇したものの、北朝鮮に係る地政学リスクの高まりからグローバルにリスクオフムードが漂う中で、27,000水準まで下落した。その後は、テクノロジー関連株が上昇を牽引し27,500水準まで徐々に値を戻す展開となった。

■ 今月の見通し

【9月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルの取引レンジは引き続き香港ドル金利と米金利の金利差が拡大している状況下、7.80から7.85を想定する。HKMAは、香港ドル安の流れを緩やかなものに留めるために、香港市場の流動性をコントロールする手段として市場から資金を吸収する役割がある為替基金短期証券の追加発行を発表した。足許の7.83水準から7.85水準まで急速に香港ドル安が進行する局面は想定し難いものの、HKMAは今後香港ドル金利の引き上げを徐々に実施する等、相場を安定させる措置を講じていく可能性が想定される。

【9月の香港ドル金利市場】

HKMAの為替基金短期証券の追加発行により、HKMAの当座預金は減少する見込みとなるも、総じて香港ドル市場の流動性は潤沢な状況が継続しており、香港ドル短期金利は足許水準で安定した推移を見込む。FRBによる年内利上げ見通しに対する不透明感や、米トランプ政権及び北朝鮮に係る地政学リスクへの警戒感等から、グローバルに金利が上昇し難い状況下、香港ドル金利についても過度な上昇とは至らないだろう。一方で、欧州を中心とした米国以外の金融政策動向により、金利上昇圧力が高まる局面等においては、香港市場からの資金流出圧力の高まりにより香港ドル金利が上昇に転じる展開も想定しておきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

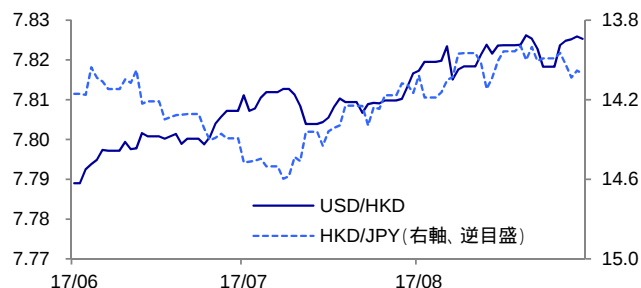
香港にはバス、フェリー、トラムなどさまざまな種類の乗り物がありますが、最も頻繁に使われているのはやはり地下鉄（MTR）だろう。MTRの路線は10本あり、香港島の主要都市はほぼ網羅しており、九龍島とのアクセスも可能としている。加えて、空港へのアクセスも急行列車で繋がっており、香港市内からは約25分で到着する等、大変便利な移動手段となっている。

日本の地下鉄にあって香港のMTRにないもの、それは時刻表です。決まっているのは始発と終電の時間のみです。運行頻度は路線と時間帯により異なりますが、概して終日2～5分間隔で運行しており、電車はどんどんやってくるので時刻表がなくても不便には感じません。

またほとんどの路線の終電は、夜中の12時半から1時過ぎまでと遅い時間帯まで運行しています。特別な祝祭日には一部の路線で24時間運行になったりする場合もあります。総じて、香港人の生活の足としてなくてはならないものとなっています。

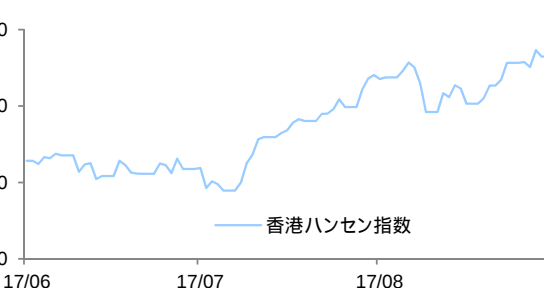
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	小売売上高 (価格、前年比)	6月	2.30%	0.10%	0.40%
8/3	日経香港PMI	7月	-	51.3	51.1
8/7	外貨準備高	7月	-	\$413.3b	\$408.0b
8/11	GDP (前年比)	2Q	3.30%	3.80%	4.30%
8/17	失業率 (季調済)	7月	3.20%	3.10%	3.10%
8/22	CPIコンボジット (前年比)	7月	2.00%	2.00%	1.90%
8/24	輸出 (前年比)	7月	9.20%	7.30%	11.10%
8/24	輸入 (前年比)	7月	9.90%	5.50%	10.40%
8/24	貿易収支 (HKD)	7月	-40.0b	-29.6b	-48.3b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.5900 ~ 6.8000
CNY/JPY 15.74 ~ 17.54
100JPY/CNY 5.9400 ~ 6.3500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

■ 先月の為替相場

【為替相場】

8月のドル/人民元相場はドル安人民元高が進行。月初のドル/人民元実勢相場は6.72近辺でオープン。材料に欠ける中、暫くは6.72近辺で横ばいが続いていたものの、中国7月外貨準備高が6か月連続で予想を上回ったことを受けて人民元高が進み始めると、その後も北朝鮮情勢緊迫化による全般的なドル安を受けたドル人民元仲値の継続的な元高設定を背景に、一時6.65割れまでドル安人民元高が進行。その後は、地政学リスクの後退を受けて一旦はドルが反発し始めると、ドル人民元も6.70手前まで戻した。16日のFOMC議事録ではインフレに対する不透明感が示され、FRB高官内でも追加利上げに対する意見が分かれるなどハト派な内容となったことや、コーンNEC委員長辞任との報道を受けたトランプ政権への不透明感の高まり等を背景に再びドル安が進行。さらに、25日のジャクソンホールでは特段金融政策や一部期待されていた経済見通しに関する言及が無かったことを受けてドル安が加速し、ドル人民元は6.64割れまでドル安人民元高となった。

【金利相場】

短期ゾーンの資金調達ニーズが高まったことを受けて、金利は短いターム物中心に上昇。月初の資金市場では資金調達ニーズが翌日(O/N)物に集中しており、1週間以内の期間の短いセクターの需給がタイトな状況が継続。その後中資系大手行からの資金放出が見られたことで金利は一旦落ち着く展開となったものの、資金調達ニーズがO/N物に集中する中、1週間以内の金利は次第に小幅ながら上昇した。月後半も、引き続き調達ニーズがO/N～2週間物に集中する中、中資系大手行による資金放出が限定的となり、短期ゾーン金利はじりじりと上昇。1か月超のターム物金利については、資金市場全体の流動性は維持される中ほぼ横ばいで推移した。3か月物の上海銀行間調達金利(SHIBOR)については、7月後半を底にじりじりと上昇が続いた。

■ 今月の見通し

【為替相場】

9月のドル/人民元相場は引き続き上値の重い相場展開か。足許は北朝鮮問題等地政学リスクが残存し、米国市場では利上げ見通しの後退等を背景にドル安の流れが継続。ECBによるQE縮小観測に伴う欧州通貨上昇圧力の高まりについても通貨バスケットの観点から人民元の上昇材料となっており、短期的に一旦はドル安人民元高方向の流れは継続か。当局からは、人民元相場が今後安定していくとの見方が示されており、少なくとも秋に開催される共産党大会までドル人民元は安定した動きが継続すると見られる。一方、党大会以降については、政府による構造改革や一層の金融引き締め政策による中国経済への影響が懸念されている中、引き続き資本流出圧力が継続することが見込まれていることもあり、年後半以降は人民元安方向に推移すると予想。

【金利市場】

足許金利が再び徐々に上昇し始めている中、中資系大手行による資金放出も限定的となり、市場流動性はタイトな状況。月末を越えたところでも、四半期末の9月初旬から中旬にかけてはマクロブルーデンス評価が意識され、レバレッジ解消に伴うポジション解消の動きが出易く、金利上昇圧力が高まりやすい地合いが継続か。月後半にかけても、月末越えの資金調達ニーズの高まり等から、短期ゾーン中心に金利上昇圧力が強まると予想。

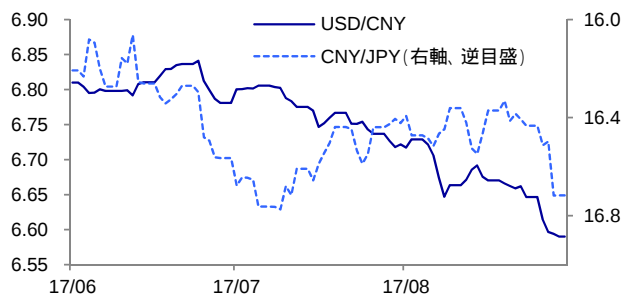
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

中国といえば、「自転車」。と思われがちですが、日本と同様に「地下鉄」が一般的かと思います。勿論、最近日本にも上陸しているシェア自転車が既に発達していますので、家が近い方や健康志向の方など「自転車」を乗る人も沢山いますが、基本的には「地下鉄」での通勤になります。上海では「地鉄」と呼ばれる14本もの地下鉄が網目状に走っており、移動手段として大変便利。ほんの10年くらい前には3本しか走っていなかったようなので、中国経済と同様急速に発展してきたことがわかります。2010年4月10日には10号線が開通したことにより、路線の総延長が420kmに達し、上海における地下鉄の開業からわずか15年で世界最長の地下鉄網となりました。今現在もなお、2020年までに合計18路線、総延長は約980kmとなる計画が立てられています。今後さらに速くの人々も地下鉄に乗れるようになり、移動手段としても一層便利になっていくと思われますが、利用が増える分朝の通勤ラッシュはすごいことになりそうですね。

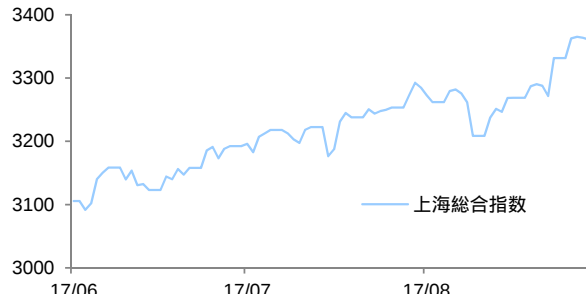
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/8	貿易収支(RMB建)	7月	293.6B	321.2B	294.3B
8/8	輸出(RMB建)(前年比)	7月	14.8%	11.2%	17.3%
8/8	輸入(RMB建)(前年比)	7月	22.6%	14.7%	23.1%
8/9	CPI(前年比)	7月	1.5%	1.4%	1.5%
8/9	PPI(前年比)	7月	5.6%	5.5%	5.5%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3370 ~ 1.3670
SGD/JPY 79.50 ~ 81.50

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

8月のシンガポールドル(SGD)相場は、夏季休暇で市場参加者が少なかったこともあり、狭いレンジ内で小動きだったが、月末にかけて11か月ぶり高値を更新した。

月初SGDは1.35台半ば近辺の10か月ぶり高値圏でオープンしたが、ダウ平均株価が連日史上最高値を更新する中でSGDが軟調推移し、徐々に1.36近辺まで戻した。更に4日の米7月雇用統計が良好な内容だったため、発表後にドルが買われ、SGDは1.36台前半へ続落した。

第2週も米7月雇用統計後のドル買いの流れや北朝鮮を巡る地政学的リスクからアジア通貨が概ね下落する中で、SGDもやや弱含み推移し、1.36台半ば近辺まで続落した。しかし、10日の海外市場で、地政学的リスクを嫌気して、2週間に亘って高値更新を続けてきた米株式が急落、米国債への逃避買いにより米ドル金利が大幅低下、ドル円も110円を下抜けて急落すると、SGDは11日に一転して1.35台後半まで買い戻されて越週した。

第3週は1.36台前半を中心に一進一退の値動きとなった。14日、ダドリーNY連銀総裁の「米経済動向が想定通りであれば、年内にもう一回の利上げを支持する」との発言を受けてドルが上昇。15日には、北朝鮮がグアムへのミサイル発射について「様子を見る」と発表し、地政学的リスクが和らいだことや、8月NY連銀製造業景気指数などの米経済指標が予想を上回ったことでドルが続伸し、SGDは1.36台後半へ反落した。しかし16日にトランプ大統領が、米主要企業トップで構成する諮問組織を解散し、政治的不透明感が強まると一転してドル売りが強まり、SGDも1.36台前半へ反発。その後も方向感に乏しい上げ下げが続いた。

第4週は、ジャクソンホール経済シンポジウムを控えた警戒感から、1.36台前半の狭いレンジ内でほぼ膠着。25日に行われたイエレンFRB議長、ドラギECB総裁の講演は、金融政策への言及や、ユーロ高牽制発言がなく終了し、それがきっかけでドル売りが強まったことで、SGDは1.35台半ば近辺まで急反発した。

第5週は、ジャクソンホールシンポジウム後の流れを引き継いでSGDが堅調推移。更に29日早朝、北朝鮮が発射したミサイルが日本上空を通過して襟裳岬沖に落下したとの報道を受けてドルが売られたため、SGDも1.35台前半をつけて11か月ぶり高値を更新している。

■ 今月の見通し

8月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高地合い継続を予想。

シンガポール経済は内需が依然として低調。輸出は足許堅調ながら、年後半は鈍化する可能性がある。一方でインフレは落ち着いており、賃金上昇圧力の弱さや、原油価格の安定により将来的に加速するリスクも低い。これらの状況に鑑み、シンガポール金融管理局(MAS)は10月の定例見直しにおいても景気下支えのため、現状の中立スタンスを継続するとの見方が大勢となっている。よってSGD相場は引き続きドル自体の方向感に沿った動きになると思われる。

ドルのトレンドとしては、ドル支援材料であるFRBの年内後1回の利上げが規定路線となっている一方で、ドル売り材料はトランプ大統領による発言や、北朝鮮に纏わる地政学的リスクなど、予想が困難な要因が多いため、警戒感から引き続きドルの上値が重い展開が続くそう。特に米債務上限問題については要注視。トランプ大統領は、8月にメキシコとの壁建設予算獲得のためには政府機関閉鎖も辞さない旨の発言を行ったが、9月30日の期限に向けて壁問題のため歳出法案、または暫定予算可決が難航し、最終的に政府機関閉鎖を招くようだと、トランプ大統領の政策実行能力に対する不信任感が一層強まり、もう一段のドル安に繋がるリスクは排除できない。1.35近辺を抜ければ、次の水準は2016年に再三撥ね返された1.33台後半が目途となる。

その他のイベントとしてはECB理事会(7日)、米FOMC(19~20日)が注目される。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

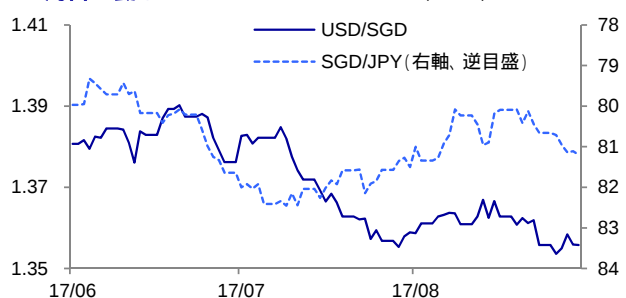
『当地の通勤事情』

当地の通勤はMRT(地下鉄)かバスの利用が一般的です。東京では圧倒的に電車通勤の方が多いと思いますが、当地ではバス通勤も多いです。バス網が発達していることに加えて、朝でも交通渋滞が少ないので、バス通勤でも通勤時間が読みやすいので利用しやすいのだと思います。わがみずほ銀行シンガポール支店の最寄にある停留所は40以上の路線が走っていることもあり、自宅近くに対象となる路線が走っている場合にはとても利便性が高いです(私も通勤に利用しています)。バスの難点としては、日本と異なり時刻表が無いことでしょうか。事前にバスアプリで、バスが停留所にあつて何分まで到着するか時間をチェックした上で、停留所までの歩く時間を逆算した上で家を出る必要があり、少し面倒くさいです。

通勤といえば、電車の混雑が気になると思います。シンガポールでは2013年から、MRTの通勤ラッシュ緩和にむけて、通勤ピークタイム以前(7時台)の乗車に対し運賃優遇が政府主導で行われています。通勤ピークタイム以前にオフィスが密集する中心地の改札を通過した場合には、運賃が無料(または割引)になります。この効果はかなりでているようで、7時台の利用者が17%増え、ピークタイムの8時台の利用者が7%も減ったそうです。朝はMRTに乗っても、日本クラスの混雑には遭遇したこともなく、通勤にかかるストレスは日本に比べると圧倒的に低いです。時間別の運賃優遇は、大胆な取り組みだと思いますが、効果も期待できるので是非日本でも導入してほしいなあ。(小川)

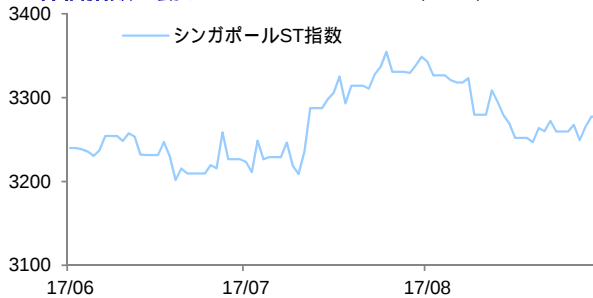
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/2	購買部景気指数	7月	-	51.0	50.9
8/2	電子産業指数	7月	-	52.2	52.1
8/11	GDP確報値(前年比)	2Q	2.5%	2.9%	2.5%
8/11	小売売上高(前年比)	6月	1.0%	1.9%	0.8%
8/17	非石油輸出(前年比)	7月	9.1%	8.5%	8.8%
8/23	CPI(前年比)	7月	0.7%	0.6%	0.5%
8/25	鉱工業生産(前年比)	7月	12.9%	21.0%	12.7%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.50 ~ 33.80
THB/JPY 3.20 ~ 3.35

バンコック資金室 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

○ドルパーツは33.20台後半で推移、後半にかけて行っている展開。
月初1日は、33.20台後半でスタート。7月タイ消費者物価指数が発表され前年比0.17%（予想:0.30%）と3ヶ月ぶりのプラスとなったが、相場への影響は限定的。2、3日ともに動意に乏しく、33.20台後半で推移。4日の7月米雇用統計が市場予想を上回り、ドルが対円で急伸するも、ドルパーツの上値は限定的。8日に発表された7月タイ消費者信頼感指数は、前月よりも1.0ポイント低い73.9だった。悪化は3カ月連続で、年初来で最低となったが相場の反応は限定的。9日から11日にかけては北朝鮮に絡む地政学リスクが意識されて上値の重い展開が続き、33.20台前半を中心としたレンジ推移に終始。14日に、ダドリーNY連銀総裁のタカ派的な発言から33.20台後半まで上昇。翌15日には、米7月小売売上高が、前月比+0.6%と、事前予想(+0.4%)を上回る結果となり、33.30まで上昇。16日にはタイ中央銀行の金融政策決定会合が開催され、予想通り政策金利は1.50%で据置かれた。その後発表された、FOMC議事録では総じてハト派的と受け止められ、33.20台前半へ下落。17日、18日は、パルセロナでのテロなども不安心理を煽る結果となり、リスクオフムードが継続し、一時33.20割れの水準まで下落。21日、タイ第2四半期の実質GDPが発表され3.7%と予想3.2%対比で強い数字が示され、じりじりとパーツ高が進行し、一時33.10台半ばに到達。しかし、その後、BOTによる外為取引のモニターを強化、投機的な行動に対する追加的な対策を検討との報道が出るもパーツが下落し、33.20台半ばへ値を戻した。23日入ると、通関ベースの7月貿易統計が発表され、貿易収支が▲\$188Mと予想\$716M対比大幅に悪い数字となると上昇に転じ、33.30台半ば付近に到達。25日に在任中のコメ担保融資制度により国に損害を与えたとして起訴されていたインラック前首相の判決を控え、判決当日に、一部では裁判所に数千人規模の支持者が集結するという報道も流れる中で、様子見ムードが続いた。25日、前述の裁判の延期が伝わり、その後インラック前首相の国外逃亡が伝わると、政情不安懸念が後退し下落。その後、ジャクソンホールでのイエレンFRB議長による講演で金融政策に対する言及が無かったことで、ドル安が進むと、33.20割れの水準まで下落。29日北朝鮮のミサイル発射を受けてアジア株式相場が総じて下落する中、タイSET指数は急伸、2015年以来の高値を受けると一時33.10台前半まで下落した。月末にかけては、33.20台付近での値動きが続いた。

■ 今月の見通し

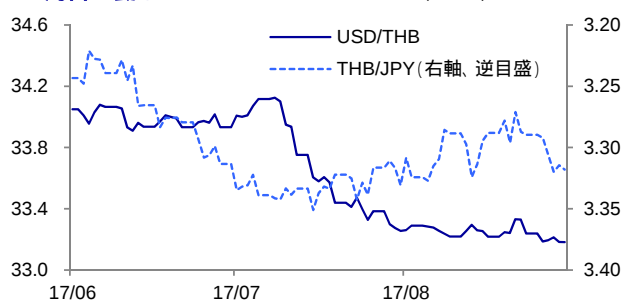
○ドルパーツは引続き上値の重い展開を予想
前月はじりじりとパーツ高が進展する結果となった。背景としては、パーツ高でもタイ経済が好調に推移し、その速度が増している点にあると考える。産業別にみると、農業セクターの伸び率が17.0%とその拡大ペースが加速しており、またホテル・レストランといった観光に関するセクターも7.5%と好調をキープしていることが、GDPの成長を支えている。一方で鉱工業や建設といった第二次産業がマイナスの伸びとなっており、製造業も1.0%とGDPが拡大している中で低調となっている。総労働人口の約4割が従事していると言われる農業セクターの伸びによって、個人消費が拡大されることも期待されるため、GDP全体の成長率は堅調な伸びが見込まれる。しかし、製造業の拡大がなければ本来的な拡大基調に入ったとは言いきれないと思う。7月貿易収支が通関ベースでは赤字となるも、タイ中央銀行(BOT)発表の国際収支は大幅な黒字であることが明らかになり、好調な経済・国際収支黒字とパーツ高になるような要因しか見当たらないのも実情。さらに、先月は、パーツ高をとめる要因として意識される政情不安についても、インラック前首相の国外逃亡により、タクシン派の勢力が弱まるとの思惑もあり、結果として政情不安懸念が後退したとしてパーツ高要因につながっている。2017年入ってからほぼ一方通行にパーツ高が進行しており、タイ中銀もパーツ高の要因をより深く調査すべく、外為取引のモニターを強化し、投機的な行動に対する追加的な対策を検討しているとの報道が出る等、当局も昨今のパーツ高を懸念している姿勢がうかがえる。但し、パーツ高がタイの貿易に悪影響を与えていることが経済指標からは伺えず、現時点ではタイ中銀としても具体的な行動に打ってでることは困難な情勢か。以上から、タイ中銀の動向に注意しながら、じりじりとパーツ高が進行するのではないかと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』
タイの主な通勤手段は、車であり、バスであり、オートバイとなります。鉄道による交通網が発達しているとはいえない。難しく、車であったり、バスであったりという乗り物に頼らざるをえません。なので、出勤時の交通渋滞はそれはひどいもので、通常20分～30分くらいで行ける距離も、ひどい時には1時間を越えるほど時間がかかることもあります。また、バイクに複数に乗っている人も多く、子供を3～4人乗せて、オートバイで走っているなんて光景も見かけます。バンコク市内ではこのような状況ではありますが、周辺域の工場団地等になると、公共交通機関なんてものは皆無なので、そこで働く方々向けに会社がバスをチャートし、バスでの通勤を行っているとのこと。数千人規模の働く工場も多く、一度に20台・30台のバスがひとつの工場に集結するなんてこともあるようです。そういった、働いている方々交代する時間は、集中するため、午後5時前後はそういったバスが入れ替わり立ち代り動き出すために、そういった工場団地内で渋滞が局地的に発生してしまうそうです。お客さまのところへ訪問するときも、帰る時間がそういった時間にぶつからないように修正して対応しているといった話をよく聞きます。

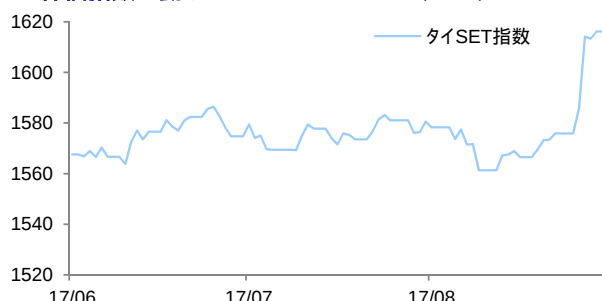
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	消費者物価指数(前年比)	7月	0.30%	0.17%	-0.05%
8/1	CPIコア(前年比)	7月	0.44%	0.48%	0.45%
8/8	消費者景気信頼感	7月	-	62.2	63.3
8/16	タイ政策決定会合	7月	1.50%	1.50%	1.50%
8/21	GDP(前年比)	2Q	3.2%	3.7%	3.3%
8/23	輸出(通関ベース/前年比)	7月	12.00%	10.48%	11.73%
8/23	貿易収支(通関ベース)	7月	\$716M	-\$188M	\$1,917M
8/23	自動車販売台数	7月	-	65,178	69,798
8/31	経常収支	7月	\$2236M	\$2768M	\$4283M
8/31	国際収支	7月	-	\$2312M	\$1969M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.2300	～	4.3000	(100円あたり)
	MYR/JPY	24.90	～	26.45	
	JPY/MYR	3.7800	～	4.0900	

マレーシアみずほ銀行 山田 輝彦

■ 先月の為替相場

8月のリングgitは月半ばまで売られた後、月後半に向けて買われる展開。

リングgitは先月末に米トランプ大統領のスカラムッチ広報部長解任の報道や米国の冴えない経済指標を材料に一旦はリングgit高で反応したが、北朝鮮の大陸間弾道ミサイル(ICBM)発射実験による地政学リスクが意識され、月初は4.27台後半で取引が始まりその後は軟調に推移した。翌日も主要通貨ではドル売り圧力が強かったが、政府系投資会社である1MBDがアブダビ政府系ファンドに対する6.03億ドルの支払いがされなかったとの報道にリングgitの軟調地合いは続いた。その後は4日の米7月雇用統計の発表を控えややリングgitは買い戻されたが、その雇用統計が事前予想比良好な結果だったことで7日以降は再びリングgit安の展開となった。加えて、北朝鮮情勢の緊張も手伝い、結局リングgitは4.29台半ばまで売られた。

14日のリングgitは先週末に発表された米7月消費者物価指数が弱かったことを受け、先週末対比ややリングgit高の4.29ちょうどレベルで寄り付くと、その後は北朝鮮の地政学リスク等が意識され同レベルで小動きとなった。しかし現地時間14日のダドリーNY連銀総裁のタカ派的発言や15日の米7月小売売上高等の経済指標が良好だったことを受けたドル買い優勢の展開にリングgitは軟調に推移するも、北朝鮮がグアム沖へのミサイル発射実験について様子を見ると報じられたことで、4.3ちょうどを抜ける展開とはならなかった。そして18日にはその日発表された4～6月期GDPが強い内容であったことで、リングgitは4.29ちょうどを付けると、21日週も堅調に推移。23日にトランプ米大統領が「たとえ政府機関が閉鎖されようとも、メキシコ国境の壁を築く」との発言にドル売りが強まったことも相俟って、結局リングgitは4.27台前半で取引を終えた。

28日の週は週初こそ前週の流れに4.2650まで買い進められたものの、北朝鮮がミサイル発射実験で日本上空を通過させ太平洋沖に着弾させたとの報道にリスク回避的な動きが強まり、現在は4.27ちょうど近辺で取引されている。(29日時点)

■ 今月の見通し

9月のリングgitは引き続きリングgit高の展開を予想。

先月発表された強い第2四半期GDPと低下基調が続く消費者物価により、早期利上げとまではいかないまでも利上げ期待感は少なからず出てきたと言える。事実、18日のGDP発表以降、他の要因があるにせよ、リングgit高方向で推移している。

昨年10月に発表された今年の予算案がばらまき色の強い内容であったことで、今年中の総選挙を予想する向きが強かったが、現在では来年の2月、3月が有力との見方が広がっている。これは来年の予算案が発表される今年10月以降になることから、再びばらまき色が強い内容となるのか、財政健全化を優先するものになるのか、憶測を呼びそうなイベントであることから、今後のリングgitの展開を占う上でも注目していきたい。

米国では再び債務上限問題を含むトランプ政権の政権運営に対する不透明感が強まる状況下、米国では年内の追加利上げへの期待が後退し、ドル売りを誘発し易い展開となっている一方、北朝鮮問題でリスクオフの動きが強まる局面もあり、リングgit相場は明確な方向感引続き出にくいものと思われるが、国内ファンダメンタルを背景としてリングgit高の展開を予想する。

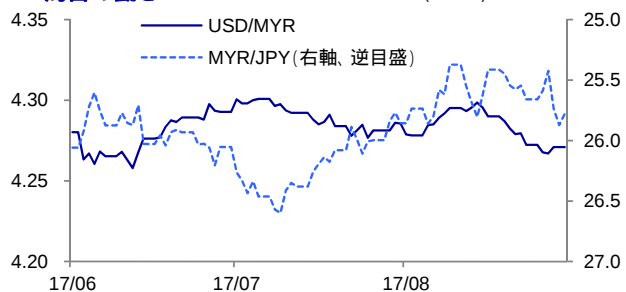
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

首都のクアラルンプールがそうであるように、恐らくマレーシア全土で公共交通機関が充実しているとは言えない状況なので、通勤と言えば殆どの人が自家用車を使っています。ただ流石に朝の出勤時と夕方の帰宅時の渋滞は目を塞ぎたくなるほど酷い(歩いて10分の距離が車で30分以上かかる等)ので、当拠点のスタッフの多くは最寄の電車の駅まで車で出て、そこから電車を利用しているようです。但し、この電車が曲者で、なにかで故障するとそのライン全線が完全にストップしてしまい、ストップした場合、出社を急ぐ人たちがこぞってタクシーを求める為、もうこうなると結局遅刻者が続出するという展開になってしまいます。勿論、そのような渋滞を避けるべく、かなり早く出勤するスタッフも当然います。因みに私は会社まで徒歩圏内なので、毎日30分弱歩いて会社まで通勤しています。

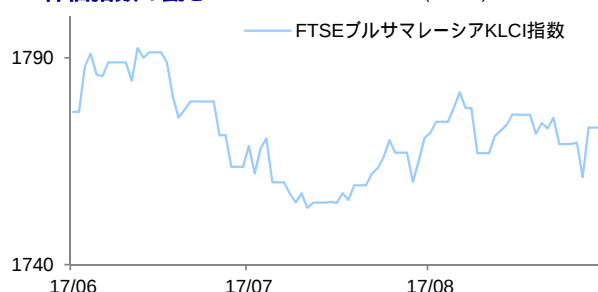
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/4	輸出(前年比)	6月	18.3%	10.0%	8.8%
8/4	輸入(前年比)	6月	19.8%	3.7%	9.6%
8/4	貿易収支(MYR)	6月	5.70B	9.88B	5.52B
8/7	外貨準備高(USD)	7/31		99.4B	99.1B
8/10	鉱工業生産(前年比)	6月	3.0%	4.0%	4.6%
8/10	製造業売上(前年比)	6月		11.5%	19.5%
8/18	GDP(前年比)	2Q	5.4%	5.8%	5.6%
8/18	経常収支(MYR)	2Q	6.2B	9.6B	5.3B
8/22	外貨準備高(USD)	8/15		100.4B	99.4B
8/23	CPI(前年比)	7月	3.4%	3.2%	3.6%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13100 ~ 13600
 IDR/JPY 0.80 ~ 0.87
 JPY/IDR 117.00 ~ 125.00

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

8月のドルルピアは、13300～13385のレンジでの取引となり、月中盤、上昇する場面も見られたが、総じて安定した推移となった。

月初、13320近辺でスタートしたドルルピアは、月前半、1日発表されたインドネシア7月CPIは、前年同月比+3.88%上昇とほぼ予想通りの結果となると相場への影響は限定的。7日発表されたインドネシア第2四半期GDPは、前年同月比+5.01%と予想(+5.08%)を下回ったが、インドネシア7月外貨準備高が、昨年11月以来7か月ぶりの減少となった前月から大幅に増加(+47億ドル)し、1,278億ドルと過去最高を更新すると、翌8日には、ドルルピアは、一時13300近辺まで下落した。

しかし、月半ば、米朝関係の緊迫化を受けた地政学リスクの高まり、11日発表されたインドネシア第2四半期経常収支が、▲49.6億ドルの赤字(予想:▲31.6億ドル)と予想を大幅に下回り、また、15日発表された7月貿易収支が予想外に▲2.7億ドルの赤字(予想:11.2億ドルの黒字)となると、ルピアは売られ一時13385近辺まで上昇した。

その後、落ち着きを取り戻したルピアは、13300近辺まで反落し、22日のインドネシア中央銀行の月例会合にて、大方の予想に反し、0.25%の利下げが発表されると、翌23日こそ、若干のルピア売りで反応したが、その後は好感される形で、海外からの資金流入に支えられ、13300台前半での取引が継続。

しかし、29日早朝北朝鮮によるミサイル発射が伝えられると、アジア通貨が対ドルで売られる動きにつられ、13300半ばでの取引となっている。
 (8月29日14:00現在)

■ 今月の見通し

今月のドルルピアは、引き続き、メインシナリオとして、13200～13400をコアレンジとしたレンジ取引を予想する。

8月に発表されたインドネシア第2四半期GDPは、力強さを欠き、またインドネシア第2四半期経常収支は、赤字幅を拡大し、ルピアのサポート材料にはならなかった。

係る状況下、インドネシア中銀は、景気下支えを目的として、昨年10月以来10か月ぶりの利下げに踏み切り、市場はこれを好感しているが、海外投資家のインドネシア投資が前半に比べ、力強さを欠き始めているところも気になる。

7月貿易収支が19か月ぶりの赤字となったが、季節的要因なのかどうかも見極めたいところ。

北朝鮮問題など地政学リスクの高まりや、インドネシア政府の政府予算レート変更(13400⇒13500)を、ある程度のルピア下落容認と解釈すれば、ドルルピアの急騰(ルピア下落)は想定していないが、ある程度の変動は視野に入れておきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の通勤事情』

インドネシア(特に弊社社員)は、自家用車で通勤する社員、遠隔地から電車を乗り継いでくる社員など、通勤方法は様々です。

今、人気なのはバイクタクシーを利用することだそうです。

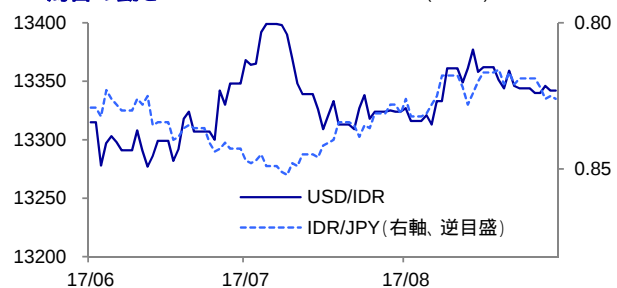
アプリを使って簡単に予約できる訳ですが、ある社員は、毎日決まったタクシーを利用するそうです。

当初こそ、配車アプリを使って予約をするらしいのですが、お互いの相性が良いと、そのタクシードライバーが、決まった場所・決まった時間にスタンバイしていて、何も言わずに乗り込むそうです。

安全面を考慮し、さすがにバイクタクシーを利用したことはありませんが、渋滞の酷いジャカルタ道路を移動中、私の乗車している4輪車の間をスワットと抜けて行くバイクタクシーを見ると、今度、チョバ(インドネシア語で「試す」の意味)してみようかと思う、今日この頃です。

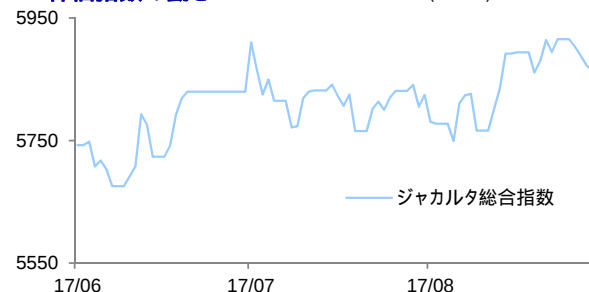
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	CPI(前年同月比)	7月	3.92%	3.88%	4.37%
8/7	GDP(前年同期比)	2Q	5.08%	5.01%	5.01%
8/7	外貨準備高(USD B)	7月	-	127.8	123.1
8/11	経常収支(USD B)	2Q	-3.16	-4.96	-2.40
8/15	輸出(前年比)	7月	35.72%	41.12%	-11.82%
8/15	貿易収支(USD M)	7月	1,125	-271	1,631
8/22	BI 7daysリバースレボ金利		4.75%	4.50%	4.75%

(資料)ブルームバーグ

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 50.70 ~ 52.00
PHP/JPY 2.06 ~ 2.17

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

月初のドル/ペソ為替相場は1ドル=50.42ペソで取引開始。米7月雇用統計を4日に控える中、トランプ米大統領が任命したばかりのスカラムッチ広報部長を解任したことから、米政権への不信感が強まり、米金利の低下とともにペソの買い戻しが優勢となり、1ドル=50.10ペソ台で雇用統計を迎えた。

7日のドル/ペソ為替相場は米7月雇用統計の結果を好感して1ドル=50.30ペソで取引開始。

8日の海外時間に北朝鮮と米国の軍事衝突を巡る懸念が強まると、地政学リスクの高まりでアジア通貨は対ドルで下落。9日には1米ドル=50.60ペソ台で取引された。

10日に発表されたフィリピン6月貿易統計では貿易収支が21.5億ドルの赤字と前月の27.5億ドルの赤字から縮小したものの、輸出(実績49.1億ドル、前月は54.9億ドル)は落ち込み、フィリピンGDP成長率への不透明感が台頭、加えて5月の直接投資金額(FDI)が前月の8.7億ドルから5.7億ドルへ減少したことも材料視され、ドル買いペソ売りバイアスは更に強まり、11日には1米ドル=51ペソ台へ上昇、18日には一時1ドル=51.63ペソで取引され、これが8月の高値となった。

その後、24～26日のジャクソンホール経済シンポジウムを前に市場参加者がドルの買い持ちポジションを解消する動きに加え、本邦企業のフィリピン企業大型買収案件が材料視されたことがペソ買いに繋がり、24日には51ペソを割り込んで取引される場面も。

29日早朝に北朝鮮がミサイルを発射したことを受け、安全資産のドル買いが優勢となるが、他のアジア通貨が対ドルで反転上昇する中、ドル/ペソの上値は次第に抑えられ、1ドル=51ペソ前半で揉み合いとなっている。(29日16時現在)

■ 今月の見通し

8月前半のドル/ペソ為替相場の上昇ピッチは速く、月末に向けて調整が入った。今月については、まず当局の介入スタンスが強く意識されることになりそう。また、一方向への相場の揺り戻しもあろう。

ただ、どんな材料が出てドル買い地合が簡単に変わりそうにない、というのが現在の相場ではないだろうか。

これまででは、ドル金利の先高観がドル買いを支えていて、ドル金利が低下、若しくは先高観が後退するケースにおいては(地政学リスク、トランプ政権に対する不透明感)、安全資産となるドル買い需要が増す構図。さらにはフィリピンの双子の赤字(財政赤字、経常赤字)が拡大傾向にあるのはペソ売り材料。

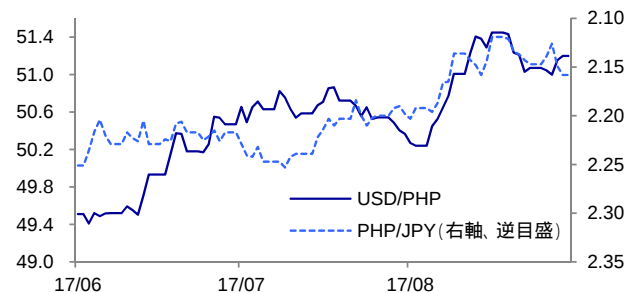
あまり注目されなかったが、フィリピン中央銀行は先月10日に政策金利を据え置いた。エスペニョーヤ総裁は、インフレについて2019年までは、中銀がターゲットとする2～4%に収まるとの見解を示し、年内の利上げ観測は急速に後退、個人的には年内の利上げはないとみる。

ペソ買い材料がないわけではないのだが・・・

6月OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金実績は、前年対比で5.7%増、フィリピン4～6月期GDPは前年対比6.5%と市場予想(同6.4%)を上回った。また、格付会社S&Pはフィリピンの今後4年間の成長率見通しが2018年6.4%、2019年6.6%、2020年6.7%になると発表。フィリピン政府が目標として掲げる6.5～7.5%の下限とはなるものの、前政権時の6.2%平均と比べると視界良好。

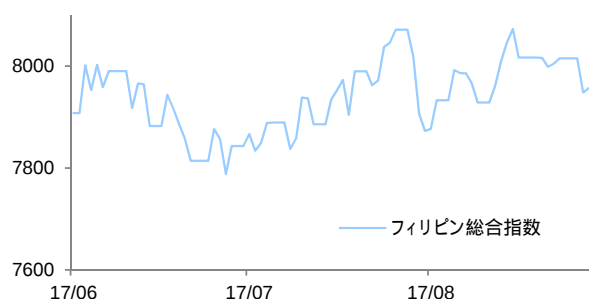
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記ご参照

(資料) ブルームバーク
期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR 63.20 ~ 64.80
INR/JPY 1.66 ~ 1.76

アジア・オセアニア資金部 田川 順也

■ 先月の為替相場

【8月の米ドル/インドルピーは下に往って来いの展開】

64.10レベルで当月の取引をスタート。2日のインド中銀会合で、利下げが発表されると、事前予想通りであったことや債券買いのため資金フローが海外から入ったことから直近のサポートラインとなっていた64.00を下抜け。3日には当月の安値となる63.57レベルを示現。ただし、同レベルではインド中銀の為替介入の噂が聞かれると同時に良好な米経済指標や北朝鮮情勢悪化を材料としたリスクオフのドル買いが継続し、翌週には64を回復。インド休場翌日の16日には実需の買いも相まって当月の高値となる64.32を超えた。

月後半は米政権への懸念やハト派と捉えられたFOMC議事録を背景にドルが全般的に売られると、ドル/ルピーの上昇も一服。じりじりと上値を切り下げながら28日執筆時点では63.90レベルでの推移となっている。

【8月のインドルピー/日本円は方向感の出ない展開】

1.725レベルで当月オープンを迎え、インド中銀会合後ルピー高が先行する流れに当月の高値である1.746まで上昇。ただ、ホリデーシーズンで取引参加者も少ない中、上述のようにリスクオフとなると円が継続的に買われ、ドル円が109円割る展開。ルピー/円も揉みあいながら18日には当月安値となる1.693まで下落。終盤にかけてはやや水準を戻し28日執筆時点では1.708レベルで取引されている。

■ 今月の見通し

【9月の米ドル/インドルピーは方向感の出ない展開を想定】

ドル/ルピーへの見通しはここ数か月間変わっておらず、8月会合での利下げ後のブライスクションはまさしく前月の本欄で予想した通りの結果であった。すなわち、海外からインドへの資本流入フローと、中銀の為替介入が睨みあう展開が続き、今月も大きな方向感の出ない展開をメインシナリオとする。

リスクシナリオとしては先月見られたようなリスク回避ムードの先行が挙げられ、この場合アジア通貨売り(延いてはルピー安)・株売り(延いてはインドからの資本流出)となるが、米-朝問題は舌戦は繰り広げられ、軍事評論家からは様々な意見が出ているものの「実際の攻撃は双方ともに利得がない」との意見や「在韓米軍の軍属・家族等が帰国する動きが見られない」等が有力視され、マーケットでは一旦消化ぎみの話題となっている状況だ。

米国では9/20にFOMCが開催される。「B/Sシート縮小開始+年末までの利上げ示唆」程度であれば市場予想となり、ドルが大きく動意づく展開とはならないだろう。

9月のドル/ルピーは64を挟んで方向感の出ない展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

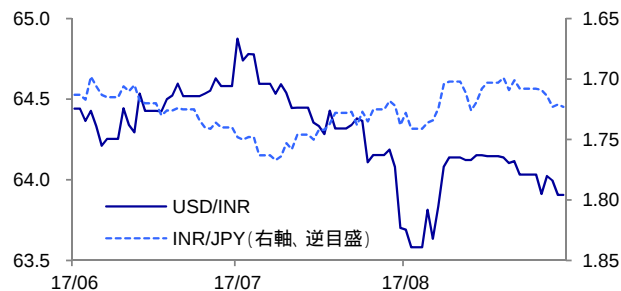
『当地の通勤事情』

こちらのスタッフの通勤手段ベスト1は断トツのデリーメトロです。全長約200キロ、全164駅、毎日約30万人が利用しており、このメトロのおかげでデリー&近郊市民は快適に通勤生活が送れています。現在工事中の2ラインが開通すればロンドンをしのぐ世界第二位の都市鉄道網となるそうです。一度乗ってしまったら最後、ギョロ目のインド人乗客からの凝視地獄から抜け出せないローカル色の濃いラインや、外国人を見かけるややお上品なラインがあったりと様々、運賃は8ルピー(約15円)からで60ルピー(約50円)、過去4度料金改定が実施されていますが、ファストフード店などの便乗としか思えない頻繁に行われる値上げに比べると大変良心的な料金です。思い出話で恐縮ですが、私がデリーに住み始めた約8年前、今と比べて交通事情はそれは酷いもので、金稼ぎしか頭にない小金持ちが所有する、ライセンスもろくに持たない一般人をドライバーにさせたBlue Killer Bus(青い殺人バス)と呼ばれる私バスが町を爆走しており(2010年コモンウェルスゲーム開催時の市内環境改革の一環として廃止されました)、料金交渉で喧嘩必至のオートリキシャ(3輪タクシー)、雨季となれば渋滞でびくともしない市バスを乗り継ぎ、家と職場を毎日ぐったりしながら通っていたものです。

現在ではウーバーなどのスマホアプリで呼べるタクシーも参入し、メトロ網も拡大中、選択肢は複数となり通勤環境は大変良くなりました。デリーメトロですがスマートカードを購入すれば行列知らず、渋滞知らず、マップを手にしていただければ観光など一時滞在の方でも大変便利な交通機関です。PM2.5やデング熱、レイプシティ、ネガティブなイメージしかないデリーですが今回ご紹介したデリーメトロは数少ない当地自慢の一つと言えます。デリーにお越しの際には是非一度お試しください。(ニューデリー支店 長谷川)

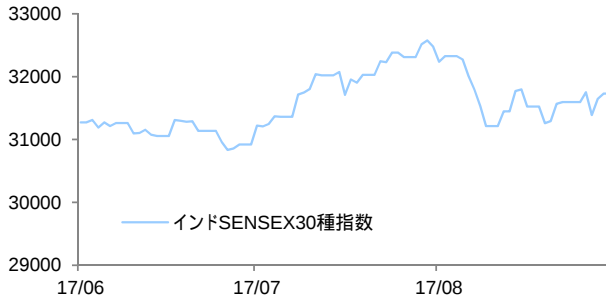
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

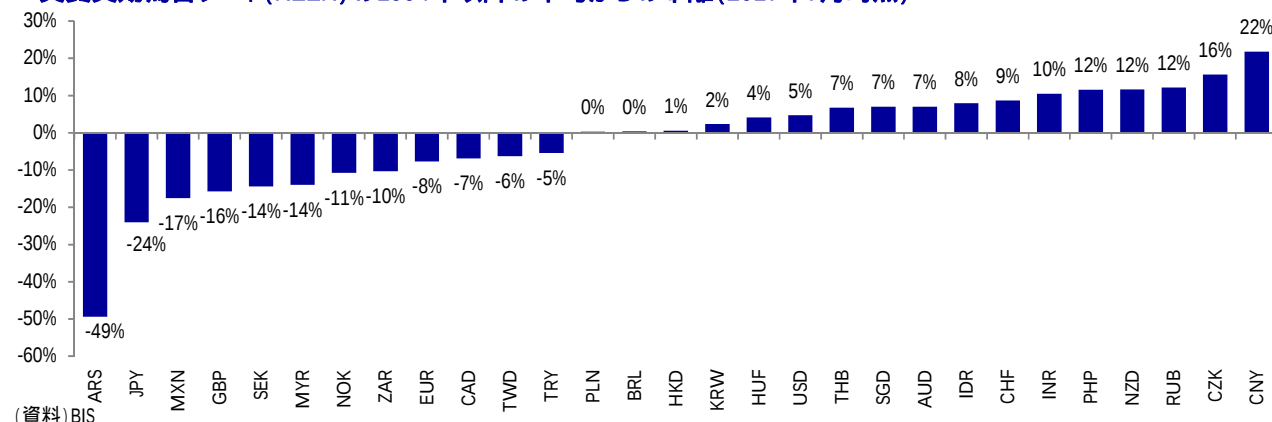
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
8/1	製造業PMI	7月	-	47.9	50.9
8/3	サービス業PMI	7月	-	45.9	53.1
8/11	鉱工業生産 (前年比)	6月	0.10%	-0.10%	2.80%
8/14	消費者物価指数 (前年比)	7月	2.05%	2.36%	1.54%
8/14	輸出 (前年比)	7月	-	3.9%	4.4%
8/14	輸入 (前年比)	7月	-	15.4%	19.0%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2016年末	2017年8月末	騰落率	株式市場	2016年末	2017年8月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	19762.6	21948.1	11.1%	-
日本	USD/JPY	116.96	109.98	-6.0%	日経平均株価	19114.37	19646.24	2.8%	9.3%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0517	1.191	13.2%	ドイツDAX指数	11481.06	12055.84	5.0%	5.0%
英国	GBP/USD	1.234	1.293	4.8%	ロンドンFTSE100指数	7142.83	7430.62	4.0%	-0.7%
豪州	AUD/USD	0.7208	0.7947	10.3%	S&P/ASX200指数	5665.8	5714.522	0.9%	-8.5%
カナダ	USD/CAD	1.3441	1.2482	-7.1%	S&Pトロント総合指数	15287.59	15211.87	-0.5%	7.1%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.945	6.5901	-5.1%	上海総合	3103.637	3360.81	8.3%	14.1%
香港	USD/HKD	7.7559	7.8259	0.9%	香港ハンセン	22000.56	27970.3	27.1%	26.0%
インド	USD/INR	67.9238	63.9063	-5.9%	インドSENSEX30種	26626.46	31730.49	19.2%	26.7%
インドネシア	USD/IDR	13473	13342	-1.0%	ジャカルタ総合	5296.711	5864.059	10.7%	11.8%
韓国	USD/KRW	1205.83	1127.55	-6.5%	韓国総合株価	2026.46	2363.19	16.6%	24.7%
マレーシア	USD/MYR	4.4862	4.271	-4.8%	ブルサマレーシアKLCI	1641.73	1773.16	8.0%	13.4%
フィリピン	USD/PHP	49.6	51.199	3.2%	フィリピン総合	6840.64	7958.57	16.3%	12.7%
シンガポール	USD/SGD	1.4468	1.3559	-6.3%	シンガポールST	2880.76	3277.26	13.8%	21.4%
台湾	USD/TWD	32.326	30.168	-6.7%	台湾加権	9253.5	10585.78	14.4%	22.6%
タイ	USD/THB	35.835	33.184	-7.4%	タイSET	1542.94	1616.16	4.7%	13.1%

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2017年7月時点)



(資料) BIS

■ 実質GDP成長率

	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2015	2016
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	0.5	0.6	2.2	2.8	1.8	1.2	3.0	2.6	1.6
日本*	-0.8	2.3	1.4	1.3	1.7	1.5	4.0	1.1	1.0
ユーロ圏	1.9	1.7	1.7	1.7	1.9	1.9	2.2	2.0	1.8
英国	1.7	1.6	1.7	2.0	1.9	2.0	1.7	2.2	1.8
豪州	2.6	2.5	3.1	1.8	2.4	1.7		2.4	2.5
カナダ*	0.5	2.8	-1.4	4.2	2.7	3.7	4.5	1.0	1.5
エマージングアジア									
中国	6.8	6.7	6.7	6.7	6.8	6.9	6.9	6.9	6.7
香港	1.9	1.0	1.8	2.0	3.2	4.3	3.8	2.4	2.0
インド	7.2	9.1	7.9	7.5	7.0	6.1	5.7	8.0	
インドネシア	5.2	4.9	5.2	5.0	4.9	5.0	5.0	4.9	5.0
韓国	3.2	2.9	3.4	2.6	2.4	2.9	2.7	2.8	2.8
マレーシア	4.6	4.1	4.0	4.3	4.5	5.6	5.8	5.0	4.2
フィリピン	6.7	6.9	7.1	7.1	6.6	6.4	6.5	6.1	6.9
シンガポール	1.3	1.9	1.9	1.2	2.9	2.5	2.9	2.0	2.0
台湾	-0.8	-0.2	1.1	2.1	2.8	2.7	2.1	0.7	1.5
タイ	2.7	3.1	3.6	3.2	3.0	3.3	3.7	2.9	3.2

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	17/01	17/02	17/03	17/04	17/05	17/06	17/07	2015	2016
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.8	4.7	4.5	4.4	4.3	4.3	4.4	5.3	4.9
日本	3.0	2.8	2.8	2.8	3.1	3.1	2.8	3.4	3.1
ユーロ圏	9.6	9.5	9.4	9.2	9.2	9.2	9.1	10.9	10.0
英国	4.7	4.7	4.6	4.6	4.5	4.4		5.4	4.9
豪州	5.7	5.9	5.9	5.7	5.5	5.5	5.7	6.1	5.7
カナダ	6.8	6.6	6.7	6.5	6.6	6.6	6.5	6.9	7.0
エマージングアジア									
中国			4.0			4.0	4.0	4.1	4.0
香港	3.3	3.3	3.2	3.2	3.2	3.2	3.1	3.3	3.4
インドネシア		5.6						6.0	5.6
韓国	3.6	4.0	3.7	4.0	3.6	3.6	3.8	3.6	3.7
マレーシア	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4		3.2	3.5
フィリピン	6.6			5.7				6.3	5.5
シンガポール			2.2			2.2	2.2	1.9	2.1
台湾	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9
タイ	1.2	1.1	1.3	1.3	1.3	1.1	1.2	0.9	1.0

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	17/02	17/03	17/04	17/05	17/06	17/07	17/08	2015	2016
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	2.7	2.4	2.2	1.9	1.6	1.7		0.1	1.3
日本	0.3	0.2	0.4	0.4	0.4	0.4		0.8	-0.1
ユーロ圏	2.0	1.5	1.9	1.4	1.3	1.3	1.5	0.0	0.2
英国	2.3	2.3	2.7	2.9	2.6	2.6		0.0	0.7
豪州		2.1			1.9			1.5	1.3
カナダ	2.0	1.6	1.6	1.3	1.0	1.2		1.1	1.4
エマージングアジア									
中国	0.8	0.9	1.2	1.5	1.5	1.4		1.4	2.0
香港	-0.1	0.5	2.0	2.0	1.9	2.0		3.0	2.4
インド	3.7	3.9	3.0	2.2	1.5	2.4		5.9	5.0
インドネシア	3.8	3.6	4.2	4.3	4.4	3.9		6.4	3.5
韓国	1.9	2.2	1.1	1.2	1.1	1.3	2.6	0.7	1.3
マレーシア	4.5	5.1	4.4	3.9	3.6	3.2		2.1	2.1
フィリピン	3.3	3.4	3.4	3.1	2.7	2.8		1.4	1.8
シンガポール	0.7	0.7	0.4	1.4	0.5	0.6		-0.5	-0.5
台湾	-0.1	0.2	0.1	0.6	1.0	0.8		-0.3	1.4
タイ	1.4	0.8	0.4	0.0	-0.1	0.2		-0.9	0.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2015Q4 (対GDP比%)	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2015 (対GDP比%)	2016
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4		-2.4	-2.4
日本	3.1	3.4	3.5	3.6	3.8	3.8	3.8	3.1	3.8
ユーロ圏	3.2	3.3	3.6	3.6	3.5	3.5		3.2	3.5
英国	-4.3	-4.5	-4.7	-5.1	-4.4	-3.9		-4.3	-4.4
豪州	-5.6	-3.5	-3.8	-2.6	-0.8	-0.7		-4.7	-2.7
カナダ	-3.4	-3.4	-3.5	-3.6	-3.3	-3.0	-2.9	-3.4	-3.3
エマージングアジア									
中国	2.8	2.5	2.4	2.4	1.8	1.5	1.4	2.8	1.8
香港	3.3	3.9	4.5	4.3	4.6	4.6		3.3	4.6
インド	-1.1	-1.1	-0.8	-0.5	-0.6	-0.7		-1.1	-0.6
インドネシア	-2.1	-2.1	-2.2	-2.1	-1.8	-1.5	-1.5	-2.1	-1.8
韓国	7.7	7.9	7.9	7.2	7.0	6.4	5.7	7.7	7.0
マレーシア	2.9	2.4	1.9	1.9	2.1	2.0	2.6	2.9	2.1
フィリピン	2.5	2.1	1.1	1.0	0.2	-0.2		2.5	0.2
シンガポール	18.1	17.2	18.8	19.5	19.0	19.8	19.6	18.1	19.0
台湾	14.4	14.1	14.3	13.7	13.5	12.9	12.8	14.4	13.5
タイ	8.1	10.2	11.1	12.2	11.7	10.9	10.6	8.1	11.4

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	1.00 - 1.25	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2017/6/14	25	2017/7/26	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2017/7/20	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2017/7/20	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2017/8/3	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2017/8/1	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.75	引き締め: 2017/7/12	0.50	2017/7/12	+25	2017/7/12	+25bp
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
香港	基準貸出金利	0.50	緩和: 2007/9/19	6.75	2008/12/17	-100	2011/12/14	現状維持
インド	翌日物レボ金利	6.25	緩和: 2015/1/15	8.00	2017/8/2	-25	2017/8/2	-25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.50	緩和: 2015/2/17	7.75	2017/8/22	-25	2017/8/22	-25bp
韓国	7日物レボ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2017/8/31	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2017/7/13	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2017/8/10	現状維持
タイ	翌日物レボ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2017/8/16	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行